
ソディアック

亜耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゾディアック

【Nコード】

N7361W

【作者名】

亜耶

【あらすじ】

どこにでもいるような普通の高校生、相模優姫はある日謎の影に襲われる。そんな彼女を救ったのは、何度も夢に現れていた理想の青年レオ。しかし、助け出され安堵したのもつかの間、優姫は突如訪れた闇にさらわれ、目を覚ましたその場所は三百年に一度の災厄に襲われる異界の地だった。そこで優姫はゾディアックの一員として、聖地、星降る丘へと旅立つこととなるが――前世と現世が交錯する恋愛ファンタジー。

プロローグ ― おわりとはじまり ―

全ては、幻影だった

信じていたものも、なにもかも

俺は

こんなことを望んでいたのではない

「今宵は、満月か」

そこは切り立った絶壁にそびえる塔――断壁の塔と呼ばれる場所。
包まれた静寂の中、塔の最上階の窓辺で、肘掛け椅子に腰掛けた
少女が呟いた。

彼女は魔女と呼ばれていた。

外見は幼く愛らしいが、その姿が成長していくさまは、誰も見たことがない。

艶かな白髪が、宵闇に浮かぶ月の光に反射しながら夜風に揺れている。陶器の様に滑らかな白い指を耳に当てながら、少女は星の瞬きに耳を傾けていた。

星達の言葉を聞きながら、少女はそれに混じる不安定な気配に気付いた。押し殺されたその気配は、ごく普通の人間ならば到底気付くことはないだろう。

しかし光を感じることにない瞳を持つ少女は、感覚的にその気配を感じることが出来た。

感じるのは最小まで抑えられた殺気。

鼻につくのは血の匂い。

そして近付く足音とわずかに乱れた呼気。

「来たか」

少女は椅子に深く座り直し、その者が現れるのを待った。

「……お前が、フィレノーラか」

静寂を切り裂き突如現れたのは、漆黒の髪を夜風になびかせた青年だった。

椅子に腰掛けたまま、フィレノーラは顔を上げ、虚ろな瞳を開く。何も見えてはいないその瞳に映ったのは、青年が鞘から抜いた細身の長剣だ。

「ふん、若造が何をしに来た」

フィレノーラは鼻を鳴らしばやいた。青年は、鈍く光る刃の切っ先を少女にむけたまま、呟く。

「…… 時空の魔女 がこんな少女とは」

「これでもお前の何倍もの時を生きておるわ」

くく、と青年は不気味に笑った。黒いマントに包まれた肩が細かく揺れる。

少女は大きなため息をついた。

「 獅子宮 が堕ちたか……」

青年の肩の揺れが止まる。同時に胸元を押さえ、暗がりで存在感を持つ鮮やかな緑色の瞳で、少女を見やった。その手はマント越しに何かを握っている。

「…… 分かるのか」

「星が全てを語っておる。お前の持つ星も、名も、ここに來た理由も」

切っ先をつきつけられたまま、フィレノーラは臆することなく淡々と答える。

青年はまとっていた黒いマントを脱ぎ捨てた。同時に強くなった血の臭いに、フィレノーラは顔をしかめた。

その虚ろな瞳には、彼女に刃を向けたままの、月明かりに照らされた青年の姿が映っている。純白の衣服には金糸で装飾が施されていたが、見る影もない程に酷く汚れていた。胸元には、真ん中に宝

石のはめ込まれた十字のネックレスが鈍く光っている。

「ならば、話は早い」

漆黒の髪を揺らして青年が微笑む。

「俺と契約をしろ。時空の魔女 フィレノーラ」

フィレノーラはかぶりを振る。

「むざむざ、しがらみに囚われようとするか……レオ」

フィレノーラの首もとにあてられた刃の切っ先が、ぐらりと揺れる。

青年からは妖しい笑みが消えた。

「……その名を呼ぶな」

言葉には明らかに怒気が含まれていた。

同時にフィレノーラが感じたのは、青年の深い悲しみと憤り。星達の語った言葉を思い出して、彼女は嘆息した。

「お前のせいではない、レオ。全ては世の理^{いっさ}、定められた宿業なのだ」

フィレノーラは顔を上げた。青年は、刃を彼女の首もとから離すことなく、淡々と言葉を紡ぐその魔女を見つめている。

フィレノーラは教えられていた。天を仰げばいつもそこにいる星達に、青年の過去を、そして未来を。

彼女は青年を哀れんだ。

「レオ……哀れな獅子よ。お前が何をしようと世の理は変えられぬ」
そう言うと、フィレノーラは腰まである白髪をなびかせ、すつくと立ち上がった。

月の光をまとい立ち上がった彼女の、独特な雰囲気圧倒されるかのように、青年は刃を向けたまま後ずさった。

そんな青年に向けて、フィレノーラは白く細い手を伸ばした。

「私と契約することが、何を意味するかは知っていよう？ 味わうのは苦しみと悠久の孤独だけぞ。……それでも」

「それでも……」

フィレノーラの高い声と、青年の低い声が重なった。

魔女の虚ろな眼は青年を見つめ、青年の鋭いまなざしは魔女を射抜く。

やがて青年が刃を下ろすと、フィレノーラの細い指が青年の胸に触れた。その指先に触れる温かいものが何であるか、彼女には分かっている。

「そこまでしてお前が望むものは、何だ？」

フィレノーラの指の先にあるのは深い傷。鋭利なもので突かれたかのようなその傷は、いずれ死に至らしめるほどのものであることが分かる。

ふふ、と青年が低く笑った。

「お前には……関係あるまい」

青年はフィレノーラの問には答えなかった。

しかし、彼女は全て悟ったかのように俯き目を伏せると、呟いた。

「……愚か者が」

同時にフィレノーラの手に力が込められる。その指先が胸元に埋まり、青年は呻き声を上げた。ズブズブと青年の体内へと侵食していく白く細い腕は、一定の位置で動きを止めた。

青年は喉から溢れる血を吐き出す。崩れ落ちそうになる体は、フィレノーラの細腕一本で支えられていた。

「時空の魔女の名において」

ぼたぼたと滴り落ちる鮮血が、石畳の床に敷かれた濃紺の絨毯に、染みを作り出してゆく。

酷く咳き込み、喉を鳴らす青年の体内に、自らの手を埋め込んだまま、フィレノーラは呪文を唱え始めた。

「獅子宮レオ、彼の者に力を」

無風の空間でフィレノーラの白髪が激しくうねる。

「時を越え、世界をも越えられる力を与えよ」

月に照らされた彼女は、まるで自身が光を放っているかのようにも見える。妖しく、そして神秘的な光は、瞬く間に二人のいる部屋を満たしていった。

そしてやがて、部屋を満たす光はついに溢れ出した。

気が付くと、青年は倒れていた。

部屋が、そして視界が白んだ後のことは、まるですっぱりと切り離してしまったかのように、記憶にない。少なくともこの場所で意識を失ってはいないことには気付いていた。

青年の倒れていた場所——それは丈の短い草原の広がる平野だった。時空の魔女 が住まうという、断壁の塔ではない。

「フィレノーラ……？」

青年は 時空の魔女 の名を呼んだ。しかし、当然返事はない。腕に力を込める。

その時気付いた。あんなにも感じていた体の痛みが跡形もなく消えていたことに。

「!？」

本来ならば、ありえないことだった。あんなにも深い傷が跡形もなく消えている。

そこにあつたのは、大きな傷跡とどす黒く変色した服だった。

それは青年と 時空の魔女 フィレノーラとの契約が無事結ばれたことを意味していた。

青年は大きく嘆息し、目を閉じた。

そのまなこに浮かぶ光景。信じていたもの全てに裏切られたという虚無感。

柔らかな風が頬を撫でていく。

酷く、酷く穏やかな場所だった。青年の心中と裏腹に、その場所は平穏に満ち溢れていた。

「……ヴァルゴ」

青年は呟いた。

その小さな声は頬を撫でる風にさらわれ、空へと消えていく。

その瞳から、一筋の涙がこぼれ落ちたことは、誰も知らない。

1 平穩に迫る影

「ふうん、それで？」

ざわめく教室の窓際、最後尾の席にすわるショートカットの女生徒が気のない返事をした。その一つ前の席の、髪を高く結わえた女生徒が反論する。

「だーかーらー……」

声を張り上げようとした少女の口を、呆れ顔で押さえたショートカットの少女が言う。

「はいはい、分かったわかった。夢に出てくる人がかっこいいってコトでしょ？ 優姫^{ゆうき}」

分かればいいとしても言うように、結わえた髪を大きく上下に揺らしながら、相模優姫^{さがみ ゆうき}は頷いた。

それを見ながら呆れ顔でいるのは、優姫の親友でもある古館香苗^{ふるだて かなえ}だ。

「あー、香苗にも見せてあげたいよ、私の夢の彼。ホントにホントにかっこいいんだから！」

そう言い放つ優姫の目は輝いている。まるで恋する乙女の目だ、と内心思いながら香苗は嘆息した。

「もう聞き飽きたし」

うんざりといった様子で肩をすくめてみせる香苗。しかし、優姫はそんな香苗の様子を意に介することもなく、どこか遠くをうつとりと見つめている。

そんな目をしている時は、何を言っても無駄だということを香苗は分かっていた。そして優姫も、なんだかんだで結局最後まで話を聞いてくれる香苗の性格を知っていた。

幼稚園で知り合い、かれこれ十年。長い付き合いだ。

「その人の名前、レオっていうの。ねー、かつこよくない？」

その時ついた、香苗の大きなため息は、優姫の耳に届くことはなかった。

「じゃ、今度はその夢のカレとちゅーでもしたら教えてよ」

古館、という表札がかかった家の前で、香苗はひらひらと手を振り、背中を向けた。親友の後ろ姿を見送って、優姫は踵を返す。鼻歌混じりに帰路につく姿は酷く陽気だ。彼女が陽気になるにもわけがあった。

「あー、今から寝るのが楽しみ」

軽やかにステップを踏むような足取りで、優姫は最近毎日のように見続けている夢を思い出していた。

風になびく漆黒の髪。

どこまでも澄んでいて、それでありながら強い意志を秘めていることを思わせる緑色の瞳。

すらりとした体躯を包む衣服は、まるで中世の騎士がまとっているような代物だった。

まるで、王子様——そう、彼女にとっては理想の男性像だった。交わした言葉の内容など覚えてはいなかった。確かに会話はしている筈だった。しかし、その内容も目が覚めた途端に忘れてしまっていた。

それでも、優姫は満足していた。

あの顔でそつと微笑んでくれる、ただそれだけで、目が覚めたその日も頑張れた。もちろんそれは、今日一日を頑張つて終えて、早く夢を見たいという不純な動機ではあったのだが。

優姫は、明らかに浮かれていた。だから、気が付かなかったのだ。自分に近づく人影に。その異様な雰囲気。

香苗の家が大通りに面しているのと対照的に、優姫の家は酷く人氣のない場所に位置していた。

幼い頃から母親に帰り道は十分に気を付けるよう、口酸っぱく言われてきていた。その度に、心配性なんだから、と母親をたしなめていたものだ。

つまりのところ、優姫は油断していたのかもしれない。もう子供ではないのだから、と。

冬も間近なこの季節、傾いていた日はいつの間にか、とつぷりと暮れてしまっていた。

自らの軽やかな足取りとは程遠い足音に、優姫が気付いたのは、

そんな時だった。低い足音だった。ハイヒールのような鋭い音ではない。

足音は優姫と一定の距離を保っているように思えた。優姫が早足になれば、低い足音も早くなり、そのスピードを緩めてみれば、後からついてくる足音も遅くなった。近付くこともなく、反対に遠ざかることもなく、足音は優姫を追っていた。

「……………」

優姫の心中は穏やかではなかった。心臓がまるで全力疾走をした後のように、早鐘を打っている。

危険だ。

確かに優姫の本能はそう告げていた。

やがて自宅が見えてきて、優姫はほっと胸をなで下ろした。ここまで来れば、家まで全力で駆け出すことも出来る。幸い、駆け足には自信があった。

「よし……」

心の中でカウントを始める優姫。

一瞬だけ後ろを盗み見る。後をつけてくる人間は、真っ黒な服に身を包んでいる。暗闇に包まれた中、すっぽりとフードまでかぶるその怪しい姿に、優姫は身震いした。

「走れっ……！」

カウントがゼロになった瞬間、優姫は地面を強く蹴った。砂利を踏みしめ、自宅までの二百メートル走に全力をふり注ぐ。そのスピードは見事なものだった。

優姫は運動部に所属していなかったが、今、もしこの走りを陸上

部の顧問が見れば、間違いなくその走りを買っていたことだろう。

「はあっ、はあっ」

蹴り上げた砂粒がふくらはぎに当たるのも気にせず、優姫は走り続けた。

あと少し、ただその言葉だけが優姫の脳内でリピートしている。

あと少し。

それはほんのわずかな気の緩みだった。間近に見える我が家に安心した優姫の緊張感が、たった一瞬だけ途切れたのだ。

ほんの一瞬の気の緩み。

しかしそれが優姫の命運を決めた。

「……あっ！」

何かに足をとられ、勢いよく前のめりに転ぶ優姫。乾いたアスファルトが優姫の足を傷付けた。

「……痛……っ」

痛む足元に視線を向けた瞬間、優姫は身震いした。てつきり石か何かに躓いたのだと思っていたのだ。しかし、それはしっかりと優姫の足を絡めとっていた。

「ひっ……」

優姫の足に絡まっていたモノ、それは——大蛇とも呼べるほど、長く太い金色の蛇。見落とすような大きさではない。

「……………あ……………」

優姫は、動くことはおろか、声すら出せずにいた。蛇に睨まれた蛙のごとく身は竦みあがり、冷や汗が背を伝うのを感じた。

そんな優姫の目の前で、じやり、と地面を踏みしめる音がする。決してその存在を忘れていたわけではない。それから逃げる為の全力疾走だった。——それなのに、動く事が出来ない。

いまだかつてない恐怖に包まれた優姫の瞳から、涙がこぼれた。

優姫は顔を上げた。そして、目の前に立つ人間を見た。

夜の闇に溶けるような黒いマント。フードにすっぽりと覆われたその顔を確認することは出来ない。

絶体絶命、万事休す。

優姫の脳裏に、死という言葉が浮かんだ。それと同時に、幼い頃から現在に至るまでの数々の思い出がよぎる。

——小さい頃は泣き虫だった。よく近所の男の子に泣かされて帰ってきたものだ。

小学に上がり初恋を経験。けれど、それは実ることはなくて。

そのまま恋愛の『れ』の字もないまま中学を卒業、高校生になった今も、彼氏はいない。実際、告白をされたことがあっても、理想通りじゃないから嫌だと言って断ってきた。

よく香苗に呆れられていたものだ。そんなんじゃ一生彼氏なんて出来ないよ、と。

平穏な記憶。

それがどうしてこんなことに——。

ガタガタと震える優姫の足首に巻き付く金の大蛇は、うねうねと這い上がり、やがて腿まで登ってきた。露出した肌に直接触れる蛇

の感触が、さらに震えを助長する。

「目を、閉じていろ」

刹那、声がした。

2 闇

どこかで聞いたことのある声だった。

その声がどこから聞こえてきたのか瞬時に判断出来なかった優姫は、左右を見回した。しかし震える視界には何も映らない。ただいつも通りの景色が広がるだけだ。

「目を、閉じている」

再び降ってきた声。今度ははっきりと、その主を捉えることが出来た。声を発したのは、目の前に立つ黒マントの人間。

その声に、優姫は心に何か引つかかるものを感じた。しかしそれが何なのかは分からなかったし、今は悠長にそれを考える時間はなかった。

そして、男の黒マントがうごめくと同時に優姫は目を見開くことになる。

目の前に立つ黒マントの人間が、マントを払い取り出したのは――剣。まるで外国の映画に出てくるような細身の剣を、その人間は脇に携えていた鞘から引き抜いたのだ。

夜の闇の中で鈍く光るそれを見て、優姫の心臓は跳ね上がった。

終わりだ――そう思い、目を閉じた。同時に鈍い音が辺りに響いた。

「……………?」

しかし、終わりは訪れたりしなかった。覚悟していた、痛みもない。

優姫は、おそろおそろ目を開けた。そして顔を上げる。

黒マントの男は、刃を振り下ろしたまま微動だにしない。その足元——つまりは優姫の足元ともいえるのだが——金色の大蛇の姿はない。そのかわりに、黒い灰のようなものが辺りに散乱している。

優姫は、足にまとわりつく灰を払おうとして、すっかり腰が抜けてしまっていることに気が付いた。足に力が入らないのだ。

「……立てないのか」

三度、黒マントの男は声を発した。

この時やつと優姫は、心に引つかかっていた靄のようなものが晴れていくのを感じた。

引つかかるもの——どこかで聞いたことがある声だということ。

そして瞬時に、優姫はその声をいつ、どこで聞いたのかを思い出した。

思わず優姫は黒マントの男の姿を凝視した。

そんな、まさか。

でも、確かに——。

「あ、なた……その声は……」

何度も、何度も聞いた。

優姫が恋い焦がれる、その人の声。

夢の中に現れる理想の人の声。

「レオ……？」

優姫の声がうわずった。

それが先程までの恐怖の為なのか、それとも夢の中の彼の人に出会えたからなのかは定かではない。

驚きと同時に足が動く。なぜ今まで動かせなかったのか不思議なくらい、すんなりと優姫は立ち上がった。もしその光景を香苗が見れば間違いなく、現金な足ね、と言うことだろう。

そのまま優姫は手を伸ばし、一瞬怯んだ黒マントの男のフードを剥がした。

優姫の頭からは、先程まで感じていた恐怖などどこかに行ってしまったようだ。

はらり、と男のフードが落ちる。

現れた男の顔を見て、優姫は目が落ちる程に見開いた。鼓動が早まる。

艶のある黒髪。端正な顔立ち。瞳の深い緑色は、何と言い表せばいいのか。

しかし、ひとつだけ確信していた。目の前にいるこの人のことを、私は見たことがある、と。

「……信じられない」

呟いた優姫の顔に、男は真っ直ぐな視線を向ける。そう意識した途端に、顔がかあつと熱くなっていく。

そんな優姫をよそに、男はマントを翻し、剣を鞘に収める。その所作は、優姫の目には優雅に映った。

「あなた……もしかして――」

言葉が続かない。

聞きたいことは沢山あるはずなのに、言葉にならない。

ありえないことだ。

そう頭の片隅で冷静に考える自分がいた。しかし同時に、そんな

ありえない現実を優姫は受け入れようとしていた。

「——レオ？」

意を決して、尋ねる。

火照る頬を押さえながらの優姫の問いに、男は答えずに目を細めた。しかしそのことがより一層、優姫に予感が正しいものであることを感じさせた。

夢に出てくる理想の青年。その彼が、現実に見えた。しかも、自分の窮地を救ってくれた、と。

「嘘、みたい——」

そこまで言いかけて、優姫は自分の頬をつねった。夢かもしれない、そんな不安がよぎったのだ。

しかし、それは杞憂に終わった。つねった場所がじんじんと痛む。少し強くやりすぎた、と優姫は後悔した。

一瞬、男が口角を上げる。

しかし、それは夢で見ていた笑顔とは違い、どこか儚げだった。男のそんな顔を見て、なぜか優姫の胸は痛んだ。

どうしてそんな顔をするの、そう尋ねようとした瞬間だった。

辺りは突如暗闇に包まれた。すぐ目の前にいたはずの青年の姿すら見えない、完全なる闇だった。

「な、何!？」

青年の輪郭はおろか、自分の体までも紛れてしまう程の暗闇。そこは光も、音も、生命すらも存在しない世界のように感じた。

何も見えず、何も聞こえず、何も感じない。

無、といういまだ経験し得ない感覚に、優姫の恐怖が募った。

「や、やだ……っ、何なの!？」

声を上げても、両手を振り回しても、何に触れることはない。

「や……、いやああっ!」

優姫は絶叫した。

そのまま、意識はさらに深い闇へと落ちていった。

3 異界

泣いてるの？

いつも仏頂面のあなたが。

「どうして……」

そんなの、当たり前じゃない。

どうしてなんて、よく言えるわね。

「……こんなのは、裏切りだ……」

怖い顔。そうそう、あなたが私に見せる顔は、いつもそうだったじゃない。

泣くなんて、らしくないわ。

「俺は……こんなことのために——」

ねえ、いつもみたいに憎まれ口を叩いてよ。

ねえ、いつもみたいに「がさつな女だな」って言うてよ。

「——俺は、こんなことを望んでいたんじゃない」

ねえ……、聞こえないの？

私の声、聞こえてないの？

ああ……、そうだ。

私は――

「……ん……？」

いつの間にか気を失っていた優姫は、夢見心地で目を覚ました。夢だったのだろうかと思うほど、あまりにリアルな夢。丈の短い草原で、抱き合う男女。それは自分いつもの夢の彼、レオだった。いつもと違うのは、夢の中で交わした言葉を目が覚めた今も覚えているということ。

不意に手を伸ばした。その先にあるのは、厚い雲に覆われた暗い空。それは夢の中で見た空と同じように見えた。遠目には稲光も見える。いやな天気、と優姫はぼんやりと考えた。

そこでようやく、自分の置かれた状況を思い出した。

「つて、ちよつと待つて！ 私……っ」

がばつと跳ね起きた優姫は、辺りを見回し頬をつねった。夢の続きにも似た風景だけれども、頬のじんじんとした痛みが、確かに目の前に広がる景色が現実であることを教えてくれていた。

「私、家に帰る途中だった、よね」

思わず疑問形になるのにも理由がある。立ち上がった優姫の眼前に広がるのは黄金色の草原。見慣れた通りも、よく立ち寄るコンビ

二も、いつも赤信号に引つ掛かる交差点も見当たらない。通い慣れた帰り道は、そこにはなかった。

どさりと音がして視線を落とすと、それはどうやら気を失っている間も大事に抱えていたらしい通学鞆だ。今日の昼に食べた弁当の包みが半分顔を覗かせている。

優姫の脳内は、この状況へと至った経緯を思い出すべく目まぐるしく働いていた。不審な人影、金の大蛇、そして――。

「あつ」

ぐるりと見回すが、そこに人影はない。もしかしたら、と優姫が期待していたのは自分の窮地を救ってくれた理想の青年、レオの姿

「……いないか」

優姫は肩を落としたが、すぐにかぶりを振った。がっかりなんてしている場合じゃない。

「……どう」

何か手がかりはないかともう一度周囲をぐるりと見回すが、この場所がどこであるのか知るための術を見つけることは出来なかった。あえて言うなら、何もなし。丈の短い草原はどこまでも続き、建築物はもちろん、人っ子ひとり見当たらないのだ。どうしよう、と呟く声が風に揺れる草の音に掻き消される。いよいよ不安になってきて、優姫は声を張り上げた。

「おい！ 誰か！」

しかし、当然ながら返事はない。再び大きく息を吸い、吐き出す。

「ねえっ！ 誰かいないの！？ 香苗ー！」

家族や友人で思い付く人の名を全て呼び終えた頃には、優姫は肩で息をしていた。

風が止むとその場所はあまりに静かだった。ただその場に立ち尽くす足が震える。いきなり訪れた得体の知れない状況に、押し潰されそうになっていた。

「ねえ……お願い、誰か返事してよ……。お願い……っ」

上手く言うことの聞かない足を無理矢理進める優姫の目から、はらりと涙がこぼれた。一度溢れた涙はとどまることなく頬を伝い落ちていく。

「怖いよ……、誰か、誰か助けて……」

何がどうしてこんなことに、と思いを巡らしても答は出ない。ただ分かっているのは、得体の知れない場所に一人ぼちだということ。そしてそれは紛れも無い現実だということ。

優姫はどこへともなく歩き続けた。

その時だった。どこからともなく聞こえる獣の唸り声。例えるなら、虎やライオンのような獰猛な――。

「ひっ……！！」

恐る恐る振り返った優姫は、視界に映ったそれを見て思わず悲鳴を上げた。

虎に似た獣が涎を垂らしながら近付いている。しかしその姿はあくまでも虎に似た何かであって虎ではない。なぜならその四肢は鱗

で覆われており、さらには本来尾が生えている場所でうねうねと蠢いているのは太い蛇であつたからだ。

あまりの恐怖に声も出せず後ずさる優姫とにじり寄る獣。その距離は次第に詰め寄られていく。

「来ないで……っ」

ようやく声を絞り出したその時、踵が何かにぶつかり、体勢を崩した優姫はその場に尻餅をついた。獣の大きな影が、足が、獲物を食いちぎろうと開けた大きな口が目の前に迫る。

優姫は歯を食いしばり目を閉じた。

刹那――上がったのは獣の咆哮。

グウオオオツと空気を揺らす声と同時にどさりと倒れ伏す音が響く。

優姫は目を開けた。

そこにあつたのは今まさに自分に襲い掛かろうとした獣が、ぴくりともせず横たわる姿。牙の間からだらりと舌がはみ出しているのは、死んでいるからなのだろうか。

今だに早鐘を打つ胸を押さえ、顔を上げたのは、獣とは違つ気配がしたからだ。

「……大丈夫か」

そこにあつたのは、待ち望んでいた救世主の顔。一陣の風に揺れる黒髪と深緑の瞳の持ち主だった。

4 邂逅

「レ……レオ……っ!？」

跳ね上がる鼓動は優姫の声を上ずらせたが、目の前の青年は意に介した様子もなく、剣に付着した獣の血を払い鞘に納める。そのひとつひとつの動作が流麗で、思わず見惚れそうになっていたのに気付き、優姫は慌てて立ち上がった。

「ああありがとう！ また助けて貰っちゃって！」

思ったより大きな声で盛大にどもり、顔から火が出そうになりながらも、ありったけの笑顔を向ける。青年ははにこりともせず背を向けた。

しかしそれにもめげずに優姫は再び口を開く。

「私、びつくりしちゃって！ だってさっきのライオンみたいなやつ？ いきなり襲ってくるから！ 大体、ここがどこなのかも分からないし、誰も返事してくれないし、意味分かんないし！」

自分の鼓動のスピードに負けないくらいの早口を披露するも、青年は振り返りもしない。いよいよいたたまれなくなるも収拾がつかず、優姫は目の前の救世主に声を投げかけ続けた。

「帰り道に金色の蛇が出てくるし、でもあなたが助けてくれて、もしたらいきなり真っ暗になって……。あ！ 私、夢であнаたのこと見たことがあるの」

自分でも何を喋っているのか分からなかったが、喋らずにはいれなかった。沈黙が訪れれば、背を向けたこの救世主は目の前から去ってしまうかもしれない——そう思ったからだ。しかし、いつまでも言葉が続く筈もなく。

「……大丈夫なら、いい」

ぶつりと言葉が途切れ訪れた沈黙に降る声。そこには何の抑揚も色もない。優姫はその声に応えることが出来なかった。

同時に動き出す足。翻った黒マントが、草を踏み締める音が遠ざかっていく。

いなくなる——その事実が優姫の体を動かした。

「——っ！」

「——あっ！？ ご、ごめんなさい——！」

ぐっ、と喉が詰まるような声を発したのは青年だ。優姫の手がマントの裾を掴み、その拍子に青年の首が絞まったからだ。

遠ざかる背を目掛け、優姫は思わず駆け出し、その手で青年を引き止めたのだ。

「でも、あの、お願い。行かないで……下さい。私、怖くて……」

気付けばマントを掴む手は震えていた。それが青年に伝わっていたかどうかは優姫には分からない。しかし、それまで背ばかりを向けていた青年は、くると向き直り深緑の瞳を優姫に向けた。

「……がさつな女だな、お前は」

首を摩りながら、大きく嘆息する。端正な顔はそれすらも美しく、優姫は頬が熱くなるのを感じた。

「……町が見えるまでは、つきあおう」

短くひとこと。

しかしそれは優姫にとって、どんな言葉より喜ばしいものだった。

「ありがとう」

そう言葉にした途端、へなへなと座り込む。どうやら自分で思った以上に、不安と安堵を感じていたようだった。体は正直だ。

「あ、あれっ？ おかしいな、あはは。ごめん、ちょっとだけ待って」

今度は中々復活しそうにない足腰を叱咤激励しつつ、青年に詫びる。顔を上げた瞬間、優姫の目はそこにある青年の顔に釘付けになった。

目を細め、自分を見下ろすその顔は、確かに微笑んでいる。それは優姫が恋い焦がれる夢の中の彼そのもの。

「……レオ」

不意に名前を声に出すと、その表情はなぜか曇った。そして微笑んでいたことを隠すように、再び何の色もない顔に戻る。

そのことを残念に思いながらも、ようやく優姫は立ち上がった。

「待たせてごめんね。じゃあ、お願いします」

姿勢を正し、ぺこりと青年に礼をする。今時の若者は、と言われるのが大嫌いな優姫は、常日頃から礼節については気をつけているつもりだった。

顔を上げた時、どことなく青年が驚いたような顔をしていたような気がしたけれど、すぐに彼は目を逸らしてしまったので優姫は気のせいだと思うことにした。

「あ。私、相模優姫。優姫って呼んでね。あなたは——レオ、よね。レオって呼んでもいい？」

もう何度も呼びかけている名前を、今更ながら確認する。これでもし違いでもしたら穴に入りたくなるほど恥ずかしいことだったが、優姫には彼と夢の中の青年は同一人物であると確信があった。

青年はそんな優姫を無表情で見下ろし、嘆息した。

「……好きにすればいい」

そう言い放った青年の横顔を眺めていると、次第に頬が熱くなっていく。優姫がぱたぱたと両手を顔の前ではためかせると、それに気付いた青年——レオは怪訝そうに視線を下ろした。

「暑いのか？」

「え！ うっん、全然暑くなんかないよ！ ……って、はつくしゅん。うん、むしろちょっと寒いくらいで！」

ずびびと鼻をすすする。言っていることとやっていることがちぐはぐになっていることは分かってはいたが、顔が暑いのは事実だし、この場所が今の恰好では肌寒いのもまた事実なのだ。

二度目のくしゃみをしたその時、ふわりと暖かいものが肩にかけ

られて、優姫は顔を上げた。

「寒いならそれを羽織れ」

かけられたのは、レオが纏っていた黒いマント。思ったよりもずしりと重さを感じるそれにはまだ青年の温もりが残っている。そのことに気付いた瞬間、また優姫の頬は熱さを増した。

「あ……ありがとう」

礼の言葉を笑顔で受けることなく、再びふいと目を逸らす。マントを脱いだ青年は、夢で見ていた通りのすらりとした細い体躯を濃紺の衣服に包み、首から下げられた十字架のネックレスの中央には赤い宝石が輝いていた。あえて言うならば、夢の中で着ていた金系の装飾が施された純白の服のほうが、より騎士然としているように見えたが、それでもその様が美しいことに変わりはない。

優姫は穴が空くほどに、青年のそんな姿を見つめ堪能する。それと同時に再び早まっていた鼓動を落ち着かせるために、大きく深呼吸した。

それを知ってか知らないでか、踵を返しレオが歩き出したので、慌てて優姫はそれを追った。

5 束の間

風にそよぐ黒髪。

ぴんと伸びた背筋にすらりとした長い脚。

時折確かめるように振り返るその眼差しはどこか優しい。

「やっぱりカツコイイ……！」

頭ひとつ分は違う背丈の違いと、脚の長さによって生まれるコンパスの差を埋めるべく早足で草原を歩く優姫は、思い切り心の声を口に出していた。

理想の青年であるレオと歩いていることは、まさに夢のような出来事だった。しかし時折聞こえてくる獣の遠吠えのような声や、遠く見える生き物の影が、優姫に全ては現実であることを忘れさせていくでくれている。

「……無駄口を叩いていないで、黙ってついて来い。夜になればますますこの辺りは危険になる」

それはちょうど聞こえてきた獣の泣き声に、びくりと肩を震わせたその時に投げ掛けられたレオの言葉。ぶっきらぼうで、ややきつくもとれる物言いだったが、優姫にはそれさえも男らしいカツコイ言い方だと肯定的にとることが出来た。

「危険って、はあ……はあ……、どういうこと？」

若干息を切らしながら、尋ねる。いまだ果ての見えない草原を見回し、優姫は多少うんざりしたが、それでもレオと一緒にならまあい

いかと思う。

「……ここは完全にオフィウクスに支配されている。先々代ゾディアックの加護も届いていない」

「おふい……？」

聞き慣れない言葉ばかりが並ぶレオの返事を、優姫は理解することが出来なかった。そしてそんな彼女を咎める様子もなく、青年は歩を進めていく。

どれほど時間歩いていたのか、優姫には分からない。しかしパンパンにむくんだふくらはぎが悲鳴を上げて、ついに助けを求めた。

「あのー、そろそろ休憩にしよう……しませんか？ もう私、へとへとで……」

大分前に行くレオに声をかける。と言ってもすっかり疲れきっていた優姫は、レオの返事を待たずに座り込んでしまった。

こんな時、運動部に入っていれば良かったな、と優姫は不甲斐なと思う。そうしたら、これくらいで音を上げることなんてなかっただろう。

思わず大きく息を吐き俯いてしまう。同時に今まで必死にレオの後についていくことで頭の隅に追いやっていた不安が、優姫の胸中でむくむくと膨らんでいった。

これから一体どうなるんだろう。

怖いな。お母さん、お父さん、香苗――。

「疲れたか」

「ひゃああつ!？」

予想外に間近で聞こえた声に驚き顔を上げると、そこにはこれまた予想外に間近にレオの顔があった。青年は屈んでへたりこんだ優姫と視線を同じにしている。

「悪い。いくら早く町へ着きたいと言っても、考えなしだった」

「えっ? えっ! そんな謝らないで! もともと運動不足な私が悪いんだから」

吐息がかかるほどの距離に優姫は目眩を覚えた。
本当に整った顔立ち。目は吸い込まれそうなほど綺麗で——あつ、睫毛もすつごく長い!

今度は声に出さずにじっと目の前の顔を凝視する。これにてっこり笑ってくれたら完璧なのに——そう思いながら足を摩った。

「痛むか?」

「大丈夫だよ、ほんと。少し休めば」

本当は、座り込んだ途端にどつと疲れが押し寄せた足はじんじんと痛んだが、心配そうに尋ねてくるその顔を見ると、正直に言えなかった。

しかしレオはそれを見透かしたのか、眉をひそめる。

「いや、休むのは町に着いてからのほうがいい。……掴まれ」

刹那、優姫の体が宙に浮く。優姫はひゃあと情けない声を出したが、自分の置かれた状況を理解すると、今度は顔が火が出るほど熱

く
な
っ
た。

レオの腕が優姫の体を抱き上げたのだった。

「ここ、これって、おおお姫さま抱っこ……！」

そのまま優姫は、幸せな気分になりつつ卒倒した。

6 王城への誘い

まったく、こんな女が 導星（みちびきぼし）だと。冗談も大概にしてくれ。

「あなたねー、まだブツクサ言ってるの？ そんなに私が……何だっけ？ 導星 っていうの？ その役目を貰ったのが不満なわけ！？」

大体、旅の一座だと？

そんな素性の分からぬ者をどうして陛下は……。

「でも残念ね！ 私にそんな役目を与えたのは陛下なんだから。背くなんてそんなこと出来ないわよね」

言うこと為すこと、いちいち癪に障る女だ。

まあ、いい。この大任を全うすれば、こんな馬鹿女からは解放される。ゾディアック集結を急がなければ――。

「ち、ちよつと！ 一人でさっさと行っちゃわないでよ。私、武器なんか扱ったことないのよ。一座で磨いたのは舞踏だけなんだから」

——本当に、鬱陶しい女。

「だから守ってよね、私のこと。ねえ、レオ騎士団長サマ！」

「……………あれ？」

重い瞼を開けるとそこには見慣れない天井があつて、優姫は今は夢だったのかと気付いた。

——また、音があつた。

聞こえてきたのは優姫とレオの声。

今まで何度も見ていた夢ではあつたが、はつきりとその音を覚えているのは、この変な場所に来てしまつてからの二回。

「……………なんか、喧嘩してた？」

今見たそれは、そうとしか言い難い夢だった。音のない世界での彼等は、もつと仲睦まじい間柄だと思えていただけに、若干シヨツクを受けつつ、優姫は呟いた。

「なんか冗談も大概にしろとか、馬鹿女とか……………」

夢で聞いたレオの声を反芻し、涙が出そうになるのをなんとか堪える。

そんな風に思われていたなんて。だって現実で出会ったレオはなんだかんだで優しくかった。何たつて、足が痛くて歩けない私をお姫様だっこ——。

そこまで思い出し、優姫は枕に顔を突っ伏した。

「あああ、こんなことならもっとダイエットしとけば良かった……」

「！」

足をばたつかせ、夕べ風呂上がりにはアイスクリームを食べてしまった自分を呪った。たったひとつアイスを食べなかったからといって、体重が思い切り変動するなんて有り得ないことは分かっていたが、そう思わずにはいらなかった。

「重いと思われたかな……だったらショック」

心底そう思いつつ、鼻を嚙る。しかしいつまでそうしていても意味のないことに気付き、上体を起こす。

「レオはどこに行っちゃったんだろう」

「俺ならここにいる」

まさか返事があると思わなかった優姫の心臓が跳ね上がる。同時に飛び上がるようにして起き上がると、辺りを見渡し、ようやく部屋の扉に背を寄せ掛けたレオの姿を見つけた。

「……レオ。ずっと、そこにいたの？」

おそろおそろ尋ねる。

恥ずかしく、顔から火が出る勢いだったが、そこにあったレオの表情に一瞬そのことを忘れかけた。

目を細め、わずかに口角を上げ——それまで頑なに無表情を通していた青年は、優姫に会ってから初めて笑顔を見せていた。

「……………！」

「赤くなったり青くなったり……忙しいな、お前は」

言葉を失った優姫に、扉の前の青年は微笑みかけた。

再び卒倒しそうになるも、それよりも今までの自分の様子をずっと見られていた恥ずかしさのほうが勝って、辛うじて意識を保つ優姫。レオはベッドの脇に置かれた椅子に腰掛けると、優姫の頬に触れた。ひんやりとしたその指先は、ほてりを鎮めてくれる。

「少し、熱があるようだ。今日はもう無理しないで休んでいろ」

そう言つと、レオは優姫をそつと横たえる。優姫は大人しくその手に身を委ね、このほてりは熱のせいだったんだ、とほつと一安心した。

「ねえ、ここ……どこなの？」

「王都シャングリラの宿だ」

それは優姫にとって聞き慣れない地名。少なくとも、家の近所にそんな場所はない。あえて言うなら、小説やゲームに出てきそうなそれにしても、建物のたの字も見当たらなかったあの場所から自分を運ぶのはどれほど大変だったのか。

優姫はふと、目頭が熱くなつていくのを感じた。そもそも、ここは一体どこなんだろう——そんな根本的な疑問が涙と一緒に沸き上がってきた。

「うつん、そうじゃなく。私、どうして……」

溢れる涙が頬を伝った。レオと一緒にいられるのは優姫にとっては夢のように嬉しいことであったのは事実だったが、今はそれより

も遙かに不安のほうが大きい。

涙は堰を切ったかのように溢れ出た。
帰りたい——心からそう思った。

「……不安、か」

そんな優姫にかけられた声は、とても優しくて。

「ごめんね。泣くつもりなんて、ないんだけどな……」

一度緩んだ涙腺を止めることは難しく、優姫は涙を溜めたまま笑う。そんな彼女を見つめるレオの表情は暗かった。

「ああ馬鹿馬鹿、私の馬鹿！ 泣いたりしてレオを困らせてどうするの！ 大体彼には助けて貰ってばかりで、私すっごいお荷物だし……」

起きぬけに昨夜の失態を思い起こし、優姫は自分に幻滅していた。困らせたいわけじゃなかった。でも、私が泣いてしまった時のレオは——とても悲しい顔をしていた、と思う。

優姫はかぶりを振り、言い訳をする。

「でもでもっ、あんな風にされたら、もう泣き止むなんて無理！ とにかく熱のせいで弱ってたの、私。うん、多分そう！」

結局、レオはあれからひと言も声を発することはなかった。しかし彼は優姫が眠りに落ちるまで、あの大きな手で優姫の頭を撫でくれたのだった。そのおかげなのかは分からないが、夢も見ることなく深くぐっすりと眠れた優姫はいつもの調子を取り戻していた。

「ああ、もう！ ウジウジしてたって仕方ないし、やっぱり謝ろう！」

優姫はレオが休む隣の部屋へ突撃するべく起き上がり靴を履いた。思い立ったら即行動を信条とした彼女は、扉の前に立ち手に力を込める。

ノックを三回、そして扉を開けると同時に言い放った。

「昨日は泣いたりしてごめんね、レオ！」

しかし気合いを入れ過ぎた故、彼女は痛恨のミスをした。

「……って、あわわ着替え中！？ ごごごめんなさいい……っ！」

ノックをするだけして返事を待たずに開けられた扉は、物凄い勢いで優姫の手によって閉められた。

目にしっかりと焼き付けたのは、見かけによらず、意外に筋肉質な上半身。

「……あれなら私をお姫様抱っこするくらい、どうってことないはずだね。それにしても——」

ぽつりと呟きながら、優姫はもう一つの発見に眉をひそめた。

「——酷い傷跡」

扉を閉める直前、確かに目で捉えたのは、胸の中央に大きく残った傷跡。あれだけ見ても大変な怪我であつたであろうことが窺えた。

「もう大丈夫なのか」

降ってきたレオの声に悲鳴が喉まで出かったが、優姫はすんで飲み込んだ。

「あ！ うん、もう大丈夫。心配かけてごめんね！ あ、あと私何にも見てないから！」

別に上着を替えていたのを目撃したくらいでこんなに釈明するのもおかしかったかな、と思いつつ両手でピースサインを作る。優姫なりの復活アピールだった。

「……なら、良かった。じゃあ、これを」

そう言つてレオは優姫に向かって握りしめたこぶしを差し出した。何だろうつこぶしの下に受け皿を作ると、開いたレオの手からぽろりと何かが転がり落ちる。

「石？」

優姫の手に載つたもの。それは石としか形容出来ないものだった。表面はつるつるしていて手触りは良かったか、あくまでそれは優姫にとってはそこらに転がっているようなただの石に見える。

「導星の石だ。お前の行く道を指し示してくれる」

「え？　なに、どういうこと？」

レオは優姫の手をそつと包見込んだ。

その時だった。

部屋の扉が激しく叩かれ、優姫は振り返った。

「お客様！　お客様、ちょっとよろしいですか！　開けて下さい！」

ドンドンと激しく叩かれるその音は恐怖さえ覚えるほどで。

優姫はレオにしがみついたが、ほどなく彼自身の手によって解かれた。

「王城ではありのままを正直に話せ。偽る必要など何もない。その石が、全ては真実だと証明してくれる」

「レオ？」

一歩、後ずさる。いつの間にか羽織っていたマントのフードをかぶり、窓際まで後退していく。

その間に、扉の外は一気に騒がしくなっていた。怒声に近いものが外では飛び交っている。

「お客様！　開けて頂かなければ困ります——あっ！？」

「どけ！　王立騎士団だ！」

刹那、激しい音が前後でして思わず身を竦める優姫。目を開けると、そんな彼女の周囲は、扉を蹴破って現れた白い甲冑を纏った大勢の人間で埋め尽くされていた。

その物々しさに、優姫は再びレオに縋り付こうとするが、その手は空を掴んだ。振り返ると、レオはその場所から忽然と姿を消していた。どうやら背後の窓から飛び降りたようで、ガラスの破片が辺りには散乱している。

「くっ、逃がしたか。逃げ足の早いやつめ」

そう言いながら優姫の前にずいと進み出たのは、長い金髪を脇に束ねた男。見た目は自分とあまり歳は変わらないように思えたが、他の人間より一際光沢のある甲冑に身を包んでいるその姿は優姫を身構えさせた。

「だ、誰？」

目の前の男を見上げ、おそろおそろ尋ねる。男はそんな優姫を値踏みするように眺めたかと思うと、流麗な仕種で礼をした。

「無粋な登場で申し訳ないね。さあ、処女宮の星の定めを持つ女よ、共に王城へ来て貰おうか」

そう言って手を差し延べた男は、空色の瞳を細めて微笑んだ。

7 予感

美しい町並みに舗装された道、行き交う人々の喧騒を眺めながら、優姫は馬の背に揺られていた。

「あの、私どこに連れていかれるんですか……？」

優姫は申し訳程度に掴まっている大きな背中の持ち主におそろおそろ尋ねた。しかし返事はなく、二人が跨がる黒馬の蹄と、列を成した他の馬が刻む一定のリズムだけが虚しく響く。

重い空気が広がる中、優姫はもう何度見回したか分からない町並みに、もう一度視線を巡らした。

建ち並ぶ石造りの家々は、カラフルで欧風の雰囲気醸し出している。そこを行き交う人々も、その容貌は日本人とは何か違う。もちろん、優姫以外のこの一団もそうだと言えた。

しかし、優姫にはそんな彼等はどこか陰鬱に見えた。目が窪み疲れきっている、そんな表現がぴったりだと感じるような。

「何だか、皆さん元気ないみたいですけど」

率直に、ぽつりと呟く。

特に誰に言ったわけでもない言葉だったが、それに今まで口を閉ざしていた男が反応した。

「災厄は継続しているからな。先代ゾディアックが失敗したせいで……」

忌ま忌ましげに返された言葉に、今度は優姫が応えることが出来なかった。そもそも言っていることの意味が分からなかったし、そ

れを尋ねられる雰囲気でもなかったように思えたからだ。

しかし、その中のゾディアックという言葉は優姫の耳は聞き逃さなかった。ゾディアック——それはレオの口からも発されていたはずだった。

「あ、あの、ゾディアックって何ですか？」

意を決して尋ねるが、やはり返事はなく優姫は肩を落とした。一瞬日本語が通じていないのではないかと疑ったが、先程返ってきた言葉は優姫の呟きに正確に応えていたものだったので、その可能性は頭の中で振り払う。

その時、唐突にそれまで二人の体を揺らしていた馬の足が止まり、優姫は男の背に鼻をぶつた。甲冑にぶつけた鼻はひどく痛んだが、顔を上げた瞬間眼前に広がった風景に思わず痛む鼻を押さえるのも忘れ、感嘆の声を漏らした。

「わああ……！」

目の前に聳える建物。それは、物語や映画、もしくは歴史の教科書の挿絵でしか見たことのない、美しい城。

跳ね橋があり再び黒馬が進み始めると、優姫は眼前に構えられた城門の大きさにも圧倒される。同時に、ここはやはり自分のいた世界とは違うのだと痛感した。

金髪の男に連れられ門をくぐった優姫は、城内の一室に通されていた。

ぐるりと見渡すと、壁には絵画や花器に生けられた花が、そして足元には靴越しでもその柔らかさを感じどの毛足の長いワインレッ

ドの絨毯が敷かれている。部屋の中央に置かれたソファに座つてみると、驚くほど体が沈みこんだ。

「すごい。私の部屋いくつ分だろう……」

優姫は目測で計り始めたが、虚しくなつて途中で断念したその時、大きな窓に映つた自分の姿に気付いた。

「うわ！ 何この格好。私、こんな姿でレオに会つてたの」

そのまま眠ってしまった為によれよれの制服、寝起きに櫛さえ入れていない髪はぼさぼさだ。こんな姿でレオの部屋を訪れたのかと思うと今にして後悔するが、今さら意味のないことだと気付く。優姫は自嘲気味に笑いながら、スカートのポケットに手を入れ、城に連れられてくる前に慌ててしまい込んだ石を取り出した。

「レオ……」

導星　の石と称して渡された石。

どこからどう見てもただの石に見えたが、それを握ると昨夜感じたレオの手の温もりを感じるような気がして、優姫は胸元で石を抱きしめた。

その時、扉をノックする音と低い声が部屋に響いた。

「入るぞ」

有無を言わず開かれた扉にいたのは、優姫をここまで連れてきた男その人だ。

男は無言で優姫に近付くと、ぐいとその顎を掴んだ。予期しない男の行動に、優姫は思わずその手を強く振り払う。

その様子に、男は一瞬怯み目を丸くしながらも、すぐに口角を上げ、くつくつと笑い出した。

「また随分と、気が強いな。それだけの気負いがあれば大丈夫か」

「な、何するのよ!」

馬鹿にされているような気配に、優姫は声を荒げる。男はそれはいなすように咳ばらいをした。

「……さあ、来てもらおうか。陛下がお待ちだ」

男の手が優姫の腕を掴む。しかし今度はどんなに振り払おうとしてもその手は剥がれず、優姫は半ば引きずられるようにしてついていくこととなったのだった。

「よくぞ来てくれた、 処女宮 の星宿を持つ者よ」

煌びやかなシャンデリアによって眩しいほどに光に満たされた広間で、壇上の玉座に構える壮年の男が、威厳に満ちた声で言い放った。

そんな中で、優姫は固まっていた。
今だかつて経験したことのないほどの緊張を強いられた結果だった。

「まあ、そう固くならなくても良い。アリエス騎士団長、彼等を下げてくれぬか。怯えておるわ」

優姫の後ろに控える騎士達を指し、隣に立つ金髪の男——アリエスに指示を出す。アリエスは「御意」と切れのよい声を返すと振り返り、壮年の男の指示通りに騎士達を広間から退出させた。

「これで少しは楽になったか。さあ、面を上げよ」

広間に反響する声を聞きながら、優姫は頭をフル回転させる。

——今私を通してたこの広間。豪華なシャンデリア。壇上の方にはめ込まれている色鮮やかなステンドグラスや、広間の入口から壇上までの足下に敷かれた深紅の絨毯、そして今は去った列を成し私を迎え入れた沢山の騎士。

この状況で、あの壇上にいる人が、ただの中年である筈はないのだ。

頭の中に、慣れない単語が思い浮かぶ。もしかして、あの人は――

「顔を上げないか、ウィルヘルム陛下の御前だぞ」

陛下——つまりは王様。壇上にあるのは玉座で、あの壮年の男の人は王様なのだ。

優姫は慌ててペコペコと頭を下げた。

「すすみません！ ごめんなさいっ！」

「良い良い。はは、それにしても今代のヴァルゴもまた、威勢がいいな」

威厳がありながら柔和な表情を浮かべ、優姫に向かって手招きを

するウィルヘルム。

優姫はどうするべきか迷ったが、ここは大人しく従うべきだと判断し、緊張で震える足で一段一段昇っていった。

玉座の前に辿り着くと、そこに腰掛けていたウィルヘルムは優姫の瞳をまっすぐ見据えたが、その威圧感に耐え兼ねなくなり目を逸らしたのは優姫だ。

「そなた、名は？」

「私は……優姫、です。相模優姫といいます」

「ユウキ？ 変わった名だな」

立派な顎髭を触りながらウィルヘルムは小さく息を吐いた。そのまま何かを考え込むように俯くこと数分、再び顔を上げたウィルヘルムは次の問いを優姫に投げかける。

「そなたは異世界から参ったのか？」

異世界——その言葉に優姫は、なるべくえなくて済むようにと頭の隅に追いやっていたその事実にぶちあたった。

そんなの否定してしまいたかった。レオとの出会いがなくなることでだけは悲しいけれど、今までのおなじなことは全て夢で、目が覚めたら退屈な英語の授業真っ只中だったり、温かい布団の中でお母さんの、ご飯よーという声に耳を塞いであと何分と言ってみたり。

もしそうならばどんなにいいか、と優姫は思う。けれど、そこまで考えてレオの言葉を思い出した。

——ありのままを正直に話せ。偽る必要など何もない——

彼はこのことを言っていたのではないか。そう思い直して、優姫は口を開いた。

「……はい、そうです。私はここじゃない場所から来ました——理由はわからないけど」

その答に満足したのかウィルヘルムは頷いている。

「やはり、託宣は正しかったか。アリエス騎士団長」

「はっ、既に 導星 の石については確認しております。この娘で間違いないかと」

自分を挟んでされたやりとりにもわけも分からず優姫は萎縮したが、玉座に座っていたウィルヘルムが立ち上がる気配がして慌てて向き直った。

「待ち侘びたぞ、 導星 の石の主にして 処女宮 ヴアルゴの星宿を持つ娘よ」

「……え？」

意味の分からない単語の羅列に、優姫は眉間に紫波を寄せる。しかし目の前のウィルヘルムはそんな様子の優姫などおかまいなしに、段下のアリエスに指示をした。

「さあ、皆に知らせよ。ゾディアック集結の兆しが現れた、と。我等は救われるのだ、と！」

はっ、と白いマントを翻し広間を出ていくアリエスの背を目で追

いながら、優姫はまた知恵熱でも出そうな頭を押さえた。

何かが、自分の知らない何か大きなことが起こりつつある——そんな予感を、優姫は胸に抱かざるを得なかった。

8 三百年の災厄

手が届く範囲にこれでもかと並べられた数多くの料理や、目の前のかごにどっさりと積まれたフルーツに、優姫は幾分辟易しながら愛想笑いを浮かべていた。

「そなたは我等の希望。さあ、遠慮せずに食べるがよい。料理長、料理長！ 次の料理を持って参れ！」

長テーブルの遥か向こうに向かい合わせで座るウィルヘルムが料理を運んでくるように促す中、もう既に八分目をとくに通り越した胃が限界に到達し悲鳴を上げ始めた所で、優姫は呻くように言った。

「こんなに美味しいお料理を頂けて恐縮なんですけど、もう食べられないです……」

優姫を主賓として開かれた宴の席。

前にはウィルヘルム、後方にはアリエスが控えたその場所で、優姫は言葉を続けた。

「あの、へ、陛下。私、何が何だか……」

離れたウィルヘルムに聞こえるよう声を張る。散々料理を食べておきながら、今さらだったかもしれないというのが強く最後はしりすばみになってしまったが、ウィルヘルムの表情から声は届いているようだった。

しかしウィルヘルムはにっこりと微笑むと手を上げた。するといつの間にか優姫の背後にはアリエスが立っており、彼は咳ばらいをした。

「陛下に声を張って頂く必要などない。聞きたいことがあるなら、私が答えよう。さあ、何なりと聞くがいい、ヴァルゴ」

「それです。ヴァルゴとか、導星とか、私にはよく分からないんです。何か、その、もしかして勘違いされてないですか」

優姫はアリエスに向き直り、おずおずと自分の疑問をぶつける。アリエスはううむ、と唸るとその空色ね瞳でまっすぐ優姫を見据えた。

「まず、結論から言おう。お前は 処女宮 ヴァルゴ——ゾディアックの一員だ。勘違いなどではない。それは我等に与えられた託宣が証明している」

「たくせん？」

「 時空の魔女 が星から教えられるお告げとでも言おうか。この三百年現れることのなかった 処女宮 ヴァルゴが、ハルスの月、異界から現る——と」

「……じゃあ、ゾディアックって何ですか？ 導星 って？」

ますます馴染みのない単語が増えたが、優姫は諦めない。もうこつなれば、一からでも説明してもらうつもりだった。そんな優姫の様子に、アリエスは嘆息する。

「本当に何も知らないのだな。それではこうしよう」

そう言って、アリエスは金髪をかきあげた。そこにあったのは小振りの宝石のついた耳飾り。

アリエスはその耳飾りを手に取ると、優姫の目の前に差し出した。若干青みがかった無色のそれは、シャンデリアの光を反射して虹色に輝いているように見える。

「これは私の—— 白羊宮 の石だ。お前の導石を出してみろ」

耳飾りの宝石に見入っていた優姫はアリエスに促され、ポケットから石を取り出す。そこから現れたものに、優姫は目を丸くした。

「え！？ どうして——」

ただの石——レオに手渡された時には、そしてさっきまでは、ただの何の変哲もなかったはずだった。しかし、それはいつの間にか濃紺に輝く石に変化していたのだ。その美しさはまさに宝石のそれだ。

さらには、濃紺の宝石の中心からは青紫色の光が射しており、それはアリエスの持つ耳飾りの宝石までへの道筋を描いていた。

「“三百年に一度、世界に災厄降りかかる時、星より定められしゾディアック集結し約束の地で祈りを捧げん”——この世界に古くから伝わる言い伝えだ」

アリエスは光が射したままの耳飾りをつけ直すと、語り始めた。

「古来よりこの世界は災厄に襲われ、そのたびに託宣によって選ばれた十二人の人間達の祈りによって救われてきたのだ。彼等こそが

ゾディアック、そして世界各地をに散らばるゾディアックを集結させるのが 導星 の役目」

「……それが、私だと？」

「 導星 たる証はその石だ。ゾディアックは皆、宝石を持っていく。私のアダマス、お前のサピロス然り。ただし 導星 であるお前の石は、他のゾディアックの石を指し示す光を宿したその間だけ、その真の姿を現すのだから」

優姫はアリエスの話を自分なりに解釈し理解していく。

つまりは、なぜか分からないけれど日本からこの異世界に来てしまった私は、ゾディアックという謎の組織の一員で 導星 と呼ばれる存在。レオに貰った石は他の十一人のゾディアックのメンバーを探すのに必要な光を放つ。そして私は彼等を探して約束の地で祈らなくちゃいけない——そういうこと。

ああ、頭がパンクしそう。

でもあともうひとつ、聞かなきゃいけない。

「……あの、何となく理解は出来ました。それで、もしその役目を終えたら私は……帰ることが出来るんでしょうか？」

優姫にとって大切なこと。

きっと今頃、いつまでも帰ってこない娘を両親は心配しているだろう。学校だってある。香苗もきつと心配してくれるはず。それにレオも去ってしまった——沈み込みそうになる気持ちを奮い立たせ、優姫は真剣に聞いた。しかし、アリエスからかえってきた言葉は優姫の望むものではなかった。

「それは分からないな。何しろゾディアックが異界から召喚される

など、今までに例がない。しかしどちらにしるお前に断る権利はない」

「……!？」

いきなり厳しいものに変わった声色に、優姫は肩を震わせた。

「三百年前から災厄は続いている。異常気候、作物の不作、疫病の発生、異形の怪物。全ては先代ゾディアックが旅を失敗したからだ。危機に頻した世界を救う為、今代のゾディアックに失敗は許されん——否、失敗すれば今度こそ世界は滅びるだろう」

アリエスの強い語気に圧倒され優姫は縮こまる。そんな優姫に射抜くような視線を向けるとアリエスは言い放った。

「逆賊 獅子宮 レオによって成功を阻まれた旅を、私達は完遂せねばならないのだ!」

9 罪人の名

「レオ——って……」

アリエスの口から発されたその名に、優姫は心臓が跳ね上がった。レオ——それは優姫の夢に何度も現れた青年であり、現実でも出会うことの叶った彼の人の名だ。

その上、優姫はほんの少し前まで彼と一緒におり、目の前で険しい表情をしたアリエスはそれを目撃したはずだった。

しかしアリエスはそのことに触れず、語り出す。

「……先代のゾディアックは旅を失敗した、と言ったな。どうして失敗したか教えてやろう——仲間の中に裏切り者が現れたからさ」

裏切り者。

まるで自分が責められているかのような感覚に陥りながら、それでも優姫はそばだてた。

「ゾディアックは聖地、星降る丘で祈りを捧げなければいけない。それが使命でありにもかかわらず、獅子宮　レオはそれを放棄した。それだけに留まらず、レオは魔女の力を得るために他のゾディアックを……皆殺しにしたのだ」

「みな——……！？」

口に出すのも恐ろしくなるようなことを言い放ってから、思ま思ましげにアリエスは齒をぎりりと鳴らす。優姫はその言葉に、まるで鈍器で頭を殴られたのような衝撃を受けた。

裏切り者——ゾディアックを皆殺し——それを本当に彼が？

早鐘を打つ鼓動と息苦しくなっていく呼吸を整える。

嘘だと思いたい。でも、私は知らない。彼の何を何も知らない——。

「……！」

そこまで考えて、疑問にぶちあたる。

優姫は逡巡することなく、それを口にした。

「それって、三百年前の話なんですよ！？ あの時私と一緒にいた人は、関係ないんですよ……！？」

「ならば何故逃げる必要が？ レオは仲間の命を贄に魔女の力と不老の体を手にいれたのだ。ゾディアックとしての使命を果たすことなく！ 混沌に飲まれようとする世界を見捨て！ あまつさえ己の私欲の為に仲間を手にかけた！ 三百年前からずっと逃げ続ける大罪人だ……！」

広間に響き渡るアリエスの声。もはや隠すことのない怒りを込めたそれは、びりびりと空気を揺らしたが、その気迫に震えを抑え切れなくなった優姫に気付くと、きまり悪そうに咳ばらいをした。

「……お前は命拾いしたのかもしれないな。騎士団が突入せねば、ヴァルゴであるお前は今頃どうなっていたか分らん。大方、利用するつもりでやってきたのだろうが」

穏やかにアリエスが続けた声は、優姫には届いていなかった。ぐるぐると視界が回る。

もしかしてまた熱が上がってきているのかもしれないと思いつつ、

レオのことを考えた。優姫には、アリエスの言うレオと自分を助けてくれたレオが同じ人物にはどうしても思えなかった。

優姫は意を決して、自分の考えを述べてみる。

「……でも、私にはそうは見えなかったです。私のことを何度も助けてくれたんです。大体、あの人が三百年前から生きているなんて、どうして分かるんですか？　だって普通の人はとくに死んでしまふほどの時間が流れてるじゃないですか。もし、その酷い話が、伝言ゲームみたいに口で伝わってきたのなら、どこかで間違っている可能性だって」

「それはない」

思いついたままに、アリエスの話のレオを否定出来る可能性を述べてみたが、それは途中で両断される。

「断言出来るのだ、それはない」

先程までのような強い語気ではないが、それ以上の言葉を許さないような低い淡々とした口調。それは今までよりずっと恐ろしく感じて、優姫は続けようとしていた言葉を引っ込めた。

それを見てアリエスは嘆息すると、優姫の耳元で小さく呟く。

「……長くなった、このことは後で詳しく話そう。お前もヴァルゴだというのなら、きっと理解出来るだろう」

そう言つとアリエスはウィルヘルムに敬礼し、後方へと戻つていった。

「さあ、もう話は終わったかね？　料理が冷めてしまうぞ」

「あ……はい」

結局、優姫は断り切れず、この後もいくつかの料理をたいらげ、食後の茶までしっかりとご馳走になったのだった。

「あー……、すごい立派なお風呂だった。でも今日は食べ過ぎたし。絶対太った、この感じ絶対太った。うー、もっとお風呂で泳いどけば良かった」

優姫はその晩、ウィルヘルムの厚意によって与えられた部屋で身悶えていた。天蓋付きのキングサイズのベッドにごろりと横になり、豪華な食べ物をたらふく詰め込んだ腹を摩る。

食後に案内された浴場には、優姫の部屋がすっぱり入ってしまうくらいの浴槽があり、久々の入浴を優姫は楽しんだ。楽しみついでに得意のクロールまで披露してしまったほどだ。

豪華過ぎる食事をし、豪華過ぎる風呂に入れた。本来であれば至福の時に浸っていたかったが、今回ばかりはそうもいかない。

優姫は、晚餐でのウィルヘルムとアリエスの話を頭の中で反芻し、盛大にため息をついた。

「もうわけ分かんないよ。ゾディアックとかヴァルゴとか 導星とか……。それにレオのことだって……」

自分はゾディアックという選ばれた者で、その中でも 導星の役目を担い旅立たなければいけない。しかもそれは拒否できない。そ

の上、レオのことを考えると、気分が暗く沈んでいく。彼のことを香苗に意気揚々と話たことが随分昔のことのように感じた。

「こんなの、ゲームの世界じゃあるまいし」

自嘲気味に笑う。

それでもこれは紛れも無い現実だった。

「私……どうしよう、どうすればいいの……」

優姫は途方に暮れながら、急激に襲い掛かってきた睡魔に、そのまま身を委ねた。

10 私、やります

「おい、くつつく鬱陶しい」

「はあ！？ くつついてなんかいないわ、ちょっと騎士団長サマは自意識過剰なんじゃないかしら？」

本当……この人は口を開けば文句ばかり。

言葉遣いが汚いだの、食事のマナーがなってないだの、身嗜みがはしたないだの。もういいかげんうんざり。

「本当に可愛いげのない女だな。踊り子は金を払わなければ愛想も振り撒けないのだな」

それさえなければ、見た目だけはいいのに。見た目だけはね。

「お前みたいなのが 導星 で、ゾディアックとしての務めを無事果たせるのやら……もっとまともなやつがそうであつたのなら、俺もこんなに気を揉まなくていいんだがな」

私だって、あんたが 獅子宮 じゃなかったらとつくにお別れしてるわよ。

いつも仏頂面の人なんかよりも、どうせ一緒に旅するなら優しい人のほうがいいもの。

「はあ……」

「はあ……」

本当、大っキライ。
この冷血漢！

「……」

優姫は目が覚めるなり、しかめっ面で起き上がった。

今見た夢——それは再び音が存在する自分とレオとが並んで歩く夢。ただし、二人が仲睦まじい様子は皆無だ。

「えー……、何、やっぱり仲悪いわけ？」

優姫は頭を抱えてぼやいた。

今の夢は、誰がどう見たってそうだと言えるだろう。一度目は間違いだろうと言い聞かせることも出来たが、二度ともなると、今まで見ていた音のない夢が優姫の幻想であって、この夢こそが事実なのだということを認識せざるを得なかった。

涙が出そうになるのをすんで堪えて、優姫は立ち上がり朝日の差し込む窓辺へ向かった。

眼下に広がる城下街。

人々の往来はまだ少ないが、民家らしき建物の煙突から上る煙りや、窓辺に干された洗濯物が、この街に息づいている人達の生活を窺わせた。

「平和そうに見えなくもないけど……ん？」

そう呟いてから、遠くに白い団体を見付けた。それがアリエスを含む騎士団一行であることに気付くのに、そう時間はかからなかった。

「こんな朝早くに、何してるんだろう」

何気なく眺めていた団体が近づくにつれ、優姫は彼等の様子がおかしいことに気付く。足を引きずり歩く者や背負われている者が大勢いるようだ。目を凝らすと、騎士団が纏う白い甲冑が薄汚れているようにも見える。

何かあったのかな——そんなことを考えていると、部屋の外が騒がしくなっていることに気付いた。

静かに扉を開け外を窺う。

そこには、朝早い時間にもかかわらずバタバタと走っていく人々の姿があった。優姫はそこから、タイミングよく目の前を通り過ぎようとした、タオルを両手一杯に抱えた若いメイドを捕まえる。

「あの、何だか騒がしいみたいですけど、どうかしたんですか？」

「あつ！ ヴアルゴ様！ ……それが騎士団の方々が怪我をされておいでで。ヴァルゴ様はまだお部屋でお休み下さい。申し訳ありませんが、私はこれで」

口早に言っただけで会釈すると、メイドは再び駆け足で去っていった。

優姫はそんな後ろ姿を見送りながら立ち尽くす。

そういえば、異形の怪物が出ると言っていた。自分だって獣に襲われかけたのだ。

「三百年の災厄……」

昨日の晩餐でのウィルヘルムとアリエスの話を思い出し、呟く。
優姫だって、真つ当な人間だ。もし人が困っていたら、手を差し延べるし、出来ることなら助けたいと思う。でも、それは自分が出来る範囲内のことだけだ。人には出来ることと出来ないこと、得手不得手がある。

ゾディアック、そしてヴァルゴ——それらは何度考え直しても、自分の身には不相応な大役としか思えない。

優姫は丁重に断るつもりで、部屋を飛び出した。

人の波について行き辿りついたのは大広間だった。そこにあった光景に優姫は息を飲む。

優姫を城まで連れてきた騎士団は、ある者は怪我を負い、ある者は倒れ伏し動かない。そんな彼等を手当てするメイドや医者らしき人間達で広間は溢れていた。そんな中、広間の最奥にはアリエスが椅子に腰掛けうなだれている。

優姫は慌てて彼の元へ駆け寄った。

「……アリエスさん、これって」

その声に顔を上げるアリエス。額には血が流れた跡があったが、それはすでに乾いている。

「ヴァルゴか……。これを見る。これがこの国の、いやこの世界の現状だ。どこからともなく現れる怪物や獣は、日に日に力を増してやがては我等の手に負えなくなるだろう」

疲労が色濃く滲み出たアリエスの声は、昨日とは打って変わって力無い。

「世界の人々の命運は我等ゾディアックにかかっているのだ」

その言葉に、優姫は固まる。

断らなきゃ——そう思うのに、うまく声を出せなかった。困ってる。

助けたい。

でも、私なんかが本当に出来るの？

私は何も知らないのに。

助けたい。

でも、怖い。

どうしたらいいの。

帰りたい。

様々な感情が心中を巡る。優姫は傷付いた騎士団の面々を見た。皆アリエス同様若く、中には自分より年下なのではないかと思えるような幼顔まである。彼等は命を賭して人々を守るべく奔走しているのだ。

「 処女宮 の星宿を持つ者は長らく生まれてこなかった。……

処女宮 だけが、まるで隠されたかのようにな。ゾディアックはかけてしまっていて意味をなさないのだ。……昨日の陛下の言葉は真実だ。お前は待ちに待った希望の星——頼む、ヴァルゴ」

アリエスは優姫に向かって頭を下げた。それに倣うように、他の

手当てを受けていた騎士やメイド、医者までもがさがるように頭を下げ懇願する。

「お願いします」

「お願いです、ヴァルゴ様」

「お願いします」

「どうか我等の希望の星に」

「お願いです、どうか」

立ち尽くす優姫の前に平伏す人々。そんな彼等を前に、用意していた断りの言葉を口にすることも出来るはずもなく。

「ヴァルゴ」

最後のアリエスのひと声に、優姫はついに折れた。

「……分かりました」

昨日あんな剣幕で、断る権利はないと言い放ったアリエスの弱った声。その声をつっぱねることが出来るほど、優姫は非情にはなれなかった。

「分かりました。私、やります」

優姫の声は予想以上に広間に高く響いた。

同時に沸き起こったの歓声と安堵のため息。人々は拍手でヴァルゴの決心を讃えた。

とてつもないことを言ってしまった——優姫は心の中で、そう独りごちる。

「ヴァルゴ！ それでは、導星として旅立ってくれるのだな」

「……はい。成功出来るように、がんばります」

空色の目を細め微笑むアリエスに、思わず優姫も笑顔で答える。
若干ひきつっているのは、わずかに後悔する気持ちがあるからだ。

「そうか、そうか……！ それでは早く陛下に知らせねば」

「アリエス殿、怪我の手当てを……」

「私は平気だ。他の者達の手当てに回ってくれ」

医者が声をかけたが、アリエスはマントを翻し大広間を後にする。
優姫はその背を見送りながら、不安げにため息をついた。

11 旅立ち

「それでは、そなたはゾディアックとしての使命を果してくれるのだな」

優姫が一大決心を宣言してから、すぐに謁見の時間が設けられ、準備も早々に済ませた優姫は、再びウィルヘルムの御前にいた。

昨日と同じく、優姫の後ろにはずらりと騎士団が列を成しており、その先頭にはアリエスがいる。

粛々とした空気の中で、壇上の玉座に鎮座するウィルヘルムは、昨日以上ににこやかに優姫に声をかけた。

「はい。出来る限り、力を尽くしたいと思います」

緊張しながら答える優姫。平凡な高校生であった優姫には、一度経験したくらいでこの空気に慣れることは到底出来なかった。

「ああ、これでやっとこの世界は救われることだろう。よく決心してくれた、ヴァルゴよ」

そう言って立ち上がるウィルヘルム。それを合図に背後の騎士団が敬礼し、鞘から抜いた剣を高く掲げる。

「それでは—— 処女宮 ヴァルゴよ、そなたに命じる。 白羊宮 アリエスと共に旅立ち、 導星 としてゾディアックを集め、 聖地星降る丘で祈りを捧げよ」

ウィルヘルムが高らかに言い放つと、騎士団から咆哮が上がった。

今さらながら優姫は、この人達が望むことを私は出来るのかな――と後悔した。

「それでは行つて参ります。必ずや世界に幸福と安寧を届けてみせましょう」

「うむ、心強いな。それでは頼んだぞ、アリエス騎士団長、そしてヴァルゴ」

「開門！」

城門が開き、旅の餞別にと渡された袋を片手に、優姫一步踏み出す。隣のアリエスは見送るウィルヘルムに敬礼をし、騎士団らには敬礼されている。優姫はそんな彼等に対してぺこりと頭を下げた。

王都シャングリラの城下街。

昨日は陰鬱に見えたその街は、打つて変わつてお祭り騒ぎだった。道行く優姫とアリエスの周囲には常に人だかりが出来たが、人々は皆陽気で、酒を飲んでいるのか顔を赤くしている者もいる。

「ヴァルゴ様！ アリエス様！」

「万歳、ゾディアック集結の兆しに万歳！」

「アリエス様――！」

そんな様子に若干押され気味の優姫は、アリエスの後ろに隠れるようにして歩いていた。

「うわ、どうしてこんなに大騒ぎしてるの？」

「当然だろう、三百年ぶりのゾディアック集結の兆しだ。……何を隠れている、ヴァルゴ、堂々としていればいい」

人々に笑顔を振り撒きながら手を振るアリエスがもう片方の手で優姫の背を押すと、優姫は慌ててかぶりを振った。

「いやいやいや、私は普通の高校生なので！　こんな目立ちたくないかないですっ」

と言いつつも、一応空気を読んで、時々アリエスの背から引き攣ってはいるが笑顔を覗かせる優姫。

「まあ、いいが……。それより今後のことだが――」

アリエスはそんな様子の優姫を見下ろしながら嘆息し、自分の持つ荷物の中から何かを取り出す。

何だろうと覗き込むと、それはどうやら地図のようだった。

「これって地図ですか？」

「そうだ、この世界――エアデの地図だ。ヴァルゴは見たことがないのか」

「この地図はないです。日本、というか地球の世界地図はありますけど……って言っても分かんないですね。あの、それより、ひと

「ついいですか？」

日本はおろか、世界の五大陸すらないその地図には、見たことのない大陸が描かれている。大きく分けて三つに別れた大陸と広大な海、そして小さな島が点在しているそれは、優姫が十七年生きてきた中で一度も見たことがないのは確かだ。

しかし、それよりも何よりも優姫はひとつ提案をする。この世界に来て——王都シャングリラに着いてからずっと気になっていたことだった。

「あの、ヴァルゴって呼ばれるの、何だか慣れなくて……名前で、優姫って呼んでくれませんか」

人々は皆、優姫のことをヴァルゴと呼ぶ。それはこの世界にゾディアックの伝承があり、且つ、その一員を担う自分がそう呼ばれるのは仕方ないと優姫も理解している。それでも、ずっとそう呼ばれていた名を呼ばれなくなるというのは寂しいのだ。

「普通はその名を誇らしいと思うのだがな。だが、お前がそれがいいと言うならば、ユウキ——その何とも変わった名前で呼ぶことに私は異論はない」

「あ、ありがとうございます。それじゃあついでにもうひとつ」

「……さっき、ひとつだけ、と言っていなかったか、ユウキ。まあいい、言ってみる」

呆れるように嘆息するアリエスに、軽く変わり者扱いされたことに気付かなかった優姫は笑顔で言い放つ。

「敬語、じゃなくてもいいですか？ 肩肘張っちゃって」

言いながら両肩をぐるぐる回す。

敬語が肩肘の張りに関係などあるわけもなかったが、アリエスは優姫のあっけらかんとした態度に毒気を抜かれたような気分になった。

「はっ、何を言うかと思えば。ヴァルゴは気が強い……ははっ、好きにしる。それと私のことも呼び捨てでいい。お前は私の部下ではない、ゾディアックとしての同士なのだから」

呆れを通り越して笑いながらアリエスが答える。優姫はその言葉に「じゃ、お言葉に甘えて」と心底喜んだ。足取りさえ軽くなったような気がするのはいのちのせいだろうか。

「ねえアリエス、どこに向かうの？」

早速普段の調子で話しかけてきた優姫の、その変わりよさの早さにアリエスは驚いたが、すぐに気を取り直し一度咳ばらいをする。

「どこに向かうも、行き先を決めるのは 導星 であるお前の役目だろう。石を出してみろ」

アリエスに促され、優姫はポケットから石を取り出した。しかし、それは何の変哲もないただの石のままだ。

「あれ？ どうしてだろう？ ただの石のままだ」

「当たり前だ、私の時はこちらから呼んだのだからな。今度はお前の方から呼びかけねばならない」

「呼びかける？」

意味が分からず困惑する優姫。するとアリエスは石を持つ優姫の手を両手で包み込んだ。突然のことに心臓が跳ね、血が昇る感覚に襲われる。

「えっ？ ええっ！？」

「頭に強く思い描け。『次なる石への道を示せ』と。慣れないのなら声に出してもいい」

言われるままに優姫は集中しようとするが、いかんせんアリエスに握られた手が気になって仕方がない。

優姫はかぶりを振って雑念を追い払いながら、大きな手から伝わった温かさで、熱を持ち始めた自分の手中の石に呼びかけた。

「お願い。次の石までの道を教えて……！」

すると、何度目かの呼びかけに答えるように手の中が熱くなったかと思うと、石は徐々に変化していき、やがて濃紺の宝石へと姿を変えた。

濃紺の宝石——サピロスからはアリエスの時と同じく青紫色の光が射していた。しかし、今度はその光は何を指すわけでもなくまっすぐ彼方へと伸びている。

「これって、一体どこに向かってるんだろ……」

光が射す方向を見ながら呟く。
いつの間にか優姫の隣で同じ方向に視線を向けていたアリエスは、

ふむ、と鼻を鳴らし、地図を開いて応える。

「……確信はないが、北にある修道院にいる女が随分と大きな宝石の首飾りをしているらしい。修道女には不似合いものだったと、以前近辺に出た怪物の討伐に向かった部下が言っていたことがある」

「修道院……」

アリエスの持つ地図を覗き込む。しかし現在地がどこであるかも把握出来ていない優姫には、修道院がどこであるか見当もつかなかった。

「……じゃあ、そこに向かおう！　ちゃっちゃっと全員見つけて、約束の地に行っちゃおう！　ねっ」

腕まくりをして気合いを入れながら、前進する。

こうなってしまったら、やるしかない——そう腹をくくって、優姫とアリエスは王都シャングリラを後にするのだった。

12 勉強と小さな命

優姫の持つ石サピロスが光を指し示したのは、王都シャングリラの北。地図にも小さく載っているオーランド修道院に、ゾディアックが持つ石らしき宝石を持つ修道女がいる、というのがアリエスからの情報だった。

しかしながら、そこへ向かうには広大な森を抜けなければならず、二人は王都からさほど離れていない街に立ち寄り、仕度を整えることにしたのだった。

「まず、その軽装を何とかするがいい。私はあちらの店に用があるから、終わったらまたここで落ち合おう」

優姫とアリエスは、街の中央広場である噴水の前で再び落ち合う約束をしてから、お互いの用事を済ます為に別れることにした。

優姫の服装はこれからの長旅に不向きであると、金貨を二枚受けとった優姫は、多くの店が並ぶ大通りへと抜ける。

「そりゃそうだね、制服で旅なんて、聞いたことないし。そもそもセーラー服着てる人なんているわけないしね」

だからといって、どのような服装が正しい旅人の姿であるかも分からない優姫は、道ゆく人々に視線を巡らせファッションチェックをする。

しかしその服装には統一感があるわけでもなく、優姫はますます混乱してしまった。

「……もう、全っ然分かんない。だいたい服くらいお城で用意して

くればいいのに！」

とりあえず一通り歩くが、どんなものを買うか決められず、盛大にため息をつきながら袋を叩く。城から貰った袋にはいくつかの傷薬と包帯、わずかな携帯食、それと果物ナイフサイズの短剣しか入っていないかったのだ。

「戻ってアリエスに見立ててもらおうかな……」

諦めて広場まで戻ろうと、踵を返す。
その時だった。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃん」

呼びかけられて振り返ると、そこには中年の男がいた。にこにこと愛想を振り撒き近寄って来る男を警戒し後ずさりつつも、優姫は男がしている前掛けの印字を見て立ち止まる。

「お嬢ちゃん、服をお探しかな？」

『服のダンカン』——何の飾り気もないネーミングセンスに失笑しながらも、とりあえず聞いてみようかと優姫は口を開く。

「おじさん、私、長旅に相応しい服を探してるんだけど……」

それなら、といったふうにこやかな笑顔を浮かべながら後ろの建物を指差す。前掛けと同じ名の看板を掲げた店はちんまりとしていたが、ショーケースに飾られた服はそれなりのようにも見えた。

店内に進むと優姫は鏡の前にと促され、男は手早く商品を見繕い

始めた。優姫が物珍しげにぐるりと見回した店内には、Ｔシャツのようなものからアリエスが身につけている甲冑の類まで、所狭しと置かれている。

「今の流行りはミシヤ織のローブなんだが、動きやすさを重視するならこっちのクーラッセ地方特産の絹で出来たワンピースなんかもいいと思うがね」

そう言つて優姫の前に出されたのは、綺麗な刺繍が施された裾の長いゆったりした服と、肌触りの良さそうな膝丈の白いワンピースだ。ワンピースには腰の部分を絞れるリボンとポケットがいくつか付いており、見た目も随分可愛い。

この世界の流行りや特産などと言われてもピンとこなかった優姫も、思わず手に取り、体に合わせてみる。大きさも丈も丁度良かった。

「でもスカートじゃ制服とあんまり変わんないか」

レギンスのようなものでもあればな、とワンピースを持ったまま店内を物色する。幸いなことに目星のものをすぐ見つけることが出来た優姫は、男に他に薦められた革のブーツと水色のジャケットとともに一式を買うことに決めた。

「いいじゃん、いいじゃん」

試着室で新しい服に着替え、鏡に全身を映した優姫は感想を漏らす。

そんな優姫の斜め後ろで、男は両手を揉みながらしきりに目で何かを訴えていた。そのことに気付いて、優姫はアリエスから渡され

た金貨を取り出した。

「お会計ってこれで足りますか？」

「金貨……！？ あ、ああ、足りるとも！七百ジンだから二枚とも頂くけど大丈夫かい？」

金貨を渡された途端、男は目を見開いたが、鏡の前にすぐに向き直った優姫は気付かない。

「じ、じゃあこれがお釣りだよ。ありがとうな」

銅貨を三枚渡され、優姫は笑顔で例を述べ踵を返す。しかし出口から足を踏み出そうとして、そこに立ちはだかる人影に阻まれた。

「アンタあ……」

そこにいたのは、随分とふくよかな中年の女性。その視線は優姫を通り越して金貨を握り締める男に向けられている。

目の前で眉を吊り上げて仁王立ちしている女の前から恐る恐る優姫が避けると、女は持っていた籠を置いて長袖の服をたくし上げながら男にじり寄っていった。

「か、母ちゃん！ いつからそこにっ！？」

「あんたって人はっ！ 恥ずかしくないのかい、こんな女の子からぼったくろうなんて！」

「ひいっ！ すまん、すまんっ」

少なくとも優姫のクラスメイトの男子の誰よりも立派な腕を振り上げて、女は男を叱り付ける。

優姫は呆気にとられながら、ただばかんとその様子を見ていたが、よくよく考えてみてようやく、自分が危うく騙される所だったのだと気付いた。

「あたしはそんなしょうもない男と結婚したわけじゃないよ！ほら、さつさとあの子に金貨を返しなっ」

「ごめん、ごめんよ母ちゃん、俺が悪かった」

しかし目の前で繰り広げられる夫婦喧嘩に、文句を言うタイミングを逃した優姫は、とりあえずほとぼりが冷めるのを待つことにした。少しばかりアリエスを待たせてしまいかもしれないが、仕方ないだろう。

「ごめんね、お嬢ちゃん。もうこんなことしないように強く言って聞かせたから、今回は許してくれないかねえ？」

深々と頭を下げるダンカン夫妻。

妻に頭を押さえつけられるように頭を下げているダンカン夫の目の回りは痣が出来ている。騙された張本人である優姫も、思わず同情してしまうほどの力関係がそこにはあった。

「本当にすまない……でも最初は騙すつもりなんかなかったんだ。ただ金貨を目の前にして、目が眩んじまったというか何というか」

言い訳混じりに金貨を二枚とも返した為に、またぎろりと睨まれ身を縮こめるダンカン夫の様子に、ついに優姫は助け舟を出した。

「大丈夫です。私も異世界の通貨のコト、勉強になりました。旦那さんも反省してくれてるみたいだし、もう許して上げて下さい」

そこまで言って、優姫は目の前の二人が目を丸くして固まってしまったことに気付く。何かおかしいことを言っただろうか、と首を傾げると、ダンカン妻がわなわなと震えながら口を開いた。

「あの、今、異世界とおっしゃいました？」

「え？ はい？」

ダンカン夫妻の顔が青ざめる。

「あ、あの、束のことお伺いしますけど、もしかしてあなた様は…
…ヴァルゴ様、でいらっしゃいますか？」

「あ、はい」

ヴァルゴ、という名前で呼ばれることは、優姫にとって不本意だったが、そのことは事実なので正直に答える。すると、ダンカン夫妻は今度は頭が地面についてしまうのではないかというくらい、さらに深々と腰を折ってみせた。

「ああ、この世界を救って下さるゾディアックの方になんという無礼を……！ 申し訳ありません！」

「すみません、すみません……っ」

ぺこぺこと頭を下げ続けるダンカン夫妻に、優姫は慌てて歩み寄

る。

「そんな、止めてください。本当に大丈夫ですから！ それよりこの服、本当はいくらなんですか？ お代、払わないと……」

「まさかまさか！ 頂くわけには参りません。夫の無礼のお詫びに差し上げます」

「ええっ！？ でも……」

いくら何でも、この一式をタダで貰うわけにもいかず優姫は食い下がる。しかし結局ダンカン妻の強すぎる押しに負け、譲り受けるような形で、長旅に相応しい衣服を手に入れることになった。

放っておけば、土下座にまで発展しそうな夫妻を何とか宥め、優姫は店を後にしようとする。

「……でも、本当にいいんですか？ コレ、安くはないですよね？」

「いいんです。元々はこの馬鹿夫が欲を出したのがいけないんですから」

あくまで譲るという姿勢を崩さないダンカン妻と、どことなく納得いかないような顔で落ち込むダンカン夫の姿に、優姫は苦笑した。

「……あ、でも、もしひとつだけヴァルゴ様をお願い出来れば、と思うことが」

踵を返しかけて、ぽつりと背後で呟かれた声に優姫は振り返った。

「今、お腹に赤ちゃんがいて……撫でてやってもらえませんか。ソディアックの祝福が得られますように――」

にわかに頬を赤らめながら微笑むダンカン妻。そんな彼女は自分の腹を愛おしそくに撫でていた。

優姫は思わぬ頼みに、二つ返事で頷いた。

その後、広場へと戻った優姫は、とうに用事を済ませ戻ってきたアリエスから、冷たい視線を向けられることになったのだった。

13 霧中の森

「うわ、この森……すっごい不気味」

街から程なくして辿り着いた森の入口で、眼前に鬱蒼と広がるその光景に、優姫は嘆息した。

優姫が住んでいた場所は都会から少し離れているとは言え、それでも通勤、通学圏内でもあるベッドタウンだった。緑が生い茂る公園や、美しく刈り込みされた緑は道路脇にあっても、森と呼べるような場所は付近にはない。

「この森は亡者の森と呼ばれている」

「は」

さらりと言つてのけられた爆弾発言に思わず固まる優姫。それに気付いたアリエスが咳ばらいをする。

「と言うのも、昔はろくに道も整備されていなかった為に、道に迷いそのまま……という者が続出してな。今現在は、道なりに進めば半日程で抜けられるようになってから安心しろ」

「でも、亡者って……お化けでも出るの？」

恐る恐る尋ねる。

優姫にとっては、それが問題だ。お化けと虫、それとあえて言うなら数学——それが優姫の唯一とも言える弱点だったのだ。

「いや、それは分かんない。とりあえず私は何度もここを通っているが、一度も遭遇したことはないがな」

真面目に答えたアリエスの言葉に、優姫はほっと胸を撫で下ろすことが出来た。

「さあ、行くぞ。日が沈む前には抜きたいからな」

しかしそれも束の間。

颯爽とマントを翻して森の中へと進もうとするアリエスに、優姫は遅れまいと早足でついていった。

森の中は、日中であるにもかかわらず随分と暗かった。時折聞こえてくる野鳥の声は不気味さを助長し、時折強く吹く風によって鳴る木々の葉擦れの音は優姫を何度も脅かせた。

アリエスは慣れているのか、歩くスピードは常に一定で速い。優姫はそれに追いつくのに必死だ。

どんどんと遠慮なく進んでいたアリエスだったが、そんな彼が足を止めたのは唐突だった。

「ぶっ」

お約束のように、アリエスの甲冑に顔から追突する優姫。鼻を押さえながら見上げると、そこには険しい顔をしたアリエスの姿があった。

「……どうしたの？」

「おかしいな」

ぼつりと呟くように言ってから辺りを見回す。アリエスについていくのに無我夢中だった優姫も、アリエスの不穏な発言にびくつきながらそれに倣う。

周囲にはいつの間にか霧が立ち込めていた。

「三叉路が見えてこない」

アリエスは右手を顎に当て、考え込む仕草をする。その間にも——といってもさして時間は経っていなかったが、霧は濃く、まるで意思を持っているかのように森を覆い尽くしていく。

「三叉路って……？」

「王都側からはすぐに三叉路が見えてくるはずだが——」

優姫はアリエスから地図を受け取り広げた。かなり簡略化されているが、そこには確かに三手に分かれた道が記されていた。

「何で、あるはずの道が——もしかして、亡者が……！」

「そんなわけがあるか。……しかし」

この世の終わりのような顔をしながら地図を握りしめる優姫。非現実的な言葉をアリエスは一蹴したが、今実際にこの身に起きていること理由は彼には皆目検討がつかない。

深くなる霧。なくなった道。二人はその場から動けなくなった。

その時だった。

微かな、微かな気配をアリエスは察知した。土を踏み締める音と小さな枝が折れる音。

「どうすればいいの……、幸先悪すぎるし……」

何も気付かない優姫は、絶望感に満ちた声を上げる。

しかし優姫が気付けないのも仕方がないことだった。近付いてくる気配——それは意図して最小限まで消されていた。それは、騎士として訓練していたアリエスが辛うじて気付ける程の、微かなものだった。

アリエスは今だに嘆きの声を上げようとする優姫の口元に手を当てた。

「しっ、静かに」

ぐつと声を押し止め、優姫は何事かと目を見開いた。隣にいるアリエスは、静かに、ゆっくりと周囲を見渡し、頭上にも視線を巡らせている。

不安が頂点に達したその時、優姫の身にも異変が襲った。

靴越しに感じる重み。それはつま先から足首へとゆっくり伝っていく。

感じたことのある感触。それはまだ記憶に新しい。

ゆっくりと下に目をやる。そこにいたのは——蛇。優姫がこの世界に来る直前に襲われたものと同じ、金の大蛇だった。

「や……っ！」

悲鳴を上げる。と同時にアリエスが優姫の足に絡み付く大蛇に付き、腰に下げた剣のつかに手を伸ばした。鞘から鈍く光る刃がわずかに顔を覗かせた、刹那。

響いたのは、空を切る音。

前方から飛んできたそれは、正確に蛇の頭を捉え、優姫の足を傷

付けることなく飛び続けた後に、後方の樹木に深々と突き刺さった。

「小剣だと!？」

蛇を貫いたそれは――小剣。

優姫は腰を抜かしながらも、蛇の行方を目で追った。金の大蛇は頭を貫かれながらもまだ生きており、長い体をつねらせている。

「……貴様か」

アリエスの低い声が響く。そこに強い怒気が含まれているような気がして、優姫は慌てて振り返った。

今や数メートル先すらも見えないほどに深い霧の中に、うつすらと見えてくる人影。その影を、目を凝らしじっと見つめる。

「……レオ!？」

「レオ!!」

その罪人の名を呼んだのは、ほぼ同時だった。

霧の中から現れたのは――レオ。

優姫と会った時と同じ黒いマントを羽織り、漆黒の髪を靡かせながら、深緑の瞳の青年は二人に近付いてきた。再開を果たせた喜びに、すぐ目の前まで来たレオに思わず飛びつきそうになる優姫だったが、肝心のレオはそんな彼女を素通りして小剣の元へと歩み寄る。

「レ――」

「貴様、よくもこの私の前に現れられたものだな……レオ!」

凄まじい怒気を放ち、アリエスがレオに斬り掛かる。優姫が止める間もなく、その刃は振り下ろされた。

静まり返った森に響き渡る甲高い音。刃と刃がぶつかった残響を聞きながら、優姫は彼等を見ていた。

アリエスの放った長剣の一撃は、レオが樹木から抜き取った小剣の短い刀身で受け止められていた。怒りの表情を浮かべたアリエスと対称的に、何の表情も浮かべず必要最小限の動きで攻撃を止めたレオ。アリエスはざりと歯ざしりをした。

「おのれ、小賢しい！ 貴様などに私の剣が……」

レオは何の言葉を発することなくアリエスの長剣を払うと、流れるような所作で小剣を懐にしまい込んだ。

優姫は、いきなり刃を向き合わせた二人のただならぬ様子に飲まれそうになりながらも、立ち上がり口を開いた。

「レオ！ アリエス！」

今だに斬りかかってもおかしくない剣幕のアリエスは、優姫を一瞥するも長剣を納める気配はない。それに対して、レオは優姫の声など聞こえていないかのように、見向きもしない。

「逆賊 獅子宮 レオ！ 私は貴様に、ウィルヘルム陛下の名の下、裁きを下す権利を有している。だが、しかし！ 私には 白羊宮 アリエスとして貴様を屠る権利がある。意味は分かっているだろう」

しかしアリエスの怒声に、レオは動かなかった。怒りに震える手に握られた長剣の切っ先が、黒いフードを目深に被るレオの首元に突き付けられるが、それでも青年の姿勢は揺るがない。

「アリエス、止めてっ！」

「ヴァルゴ……いや、ユウキ。私は、知っているのだ。この男の罪を！ 私はレオを許さない……っ」

優姫の何度目かの制止の声に、やっとアリエスは答えた。

「レオ、貴様は話せるのか？ ユウキに、お前がしたことを……」

怒りの声はそのままに、口元を歪める。優姫はぞわりと背筋に寒気を感じた。再び視線をレオに映すと、その深緑の瞳と目が合ったが、すぐにふいと逸らされる。

「話せるものか。貴様は、ヴァルゴに——」

言いかけた時だった。

ざあっと吹き抜ける風が三人を襲う。優姫は突然のことに目を閉じ、風がおさまってから目を開け、直後、目の前に広がった光景に大きく見開いた。

「え、霧が——」

あんなにも深く濃い霧が、跡形もなく消えていた。気が付けば、アリエスと対峙していたレオも消えている。

「くっ……」

忌ま忌ましげに声を絞り出すアリエスをよそに、優姫はあつという間に終わってしまった邂逅を名残惜しむように嘆息した。

この時、二人は気づいていなかったが、レオが仕留めた金の大蛇は、跡形もなく消えていたのだった。

14 過去生

「……ねえ、アリエス」

オーランド修道院へと続く道を歩く最中。この森に足を踏み入れた時の三割増しでとっつきにくいオーラを醸し出すアリエスに、意を決して優姫は話しかけた。

「さっきのことだけど、何かすごく気になること、言ってたみたいけど」

大きな歩幅に負けないよう小走りの為、切れ切れになる言葉。アリエスは変わらずハイスピードで歩を進める。

「レオが、ヴァルゴにしたことって、何？」

霧が晴れる直前、アリエスは意味深な発言をした。優姫にとって気にならないわけがなく、それを尋ねることは当然の行動だとも言えた。

しかし、アリエスは射抜くような空色の瞳を向けるが、一向に口を開こうとしない。優姫は小走りを全力疾走に変え、アリエスの正面に回り込んで、語気強く言い放った。

「レオは何をしたの！？」

そこでようやく足を止めたアリエス。優姫は一瞬怯んだが、引かない。

わずかに落ちた沈黙の後、ようやく彼はその重い口を開いた。

「……私は、 白羊宮 アリエスだ。今も、昔も」

その言葉の意味が分からず、優姫は眉をひそめた。しかしアリエスはそのまま続ける。

「記憶があるのだ、私には——先代ゾディアックとしてのアリエスの記憶が、な」

「……それって——」

先代ゾディアックとしての記憶。

その言葉の意味することに、優姫は考えを巡らす。

アリエスが、アリエスだったという記憶。それは——。

「——前世ってこと？」

優姫が恐る恐る発した言葉に、アリエスはゆっくりと、しかし確かに頷いた。

「過去生がゾディアックであった記憶を持った者がいたなど、今まで聞いたことはない。まして同じ星宿を持って生まれるなど……」

この意味が分かるか、とアリエスが問う。そこにある表情があまりに冷たく見えて、優姫はその問いに答えることを躊躇ってしまう。しかしそれを察したようにアリエスは表情を幾分崩すと、自嘲するように息を吐いた。

「旅を失敗したゾディアックは、その生を終えても己の役目からは逃れられない——転生を経ても」

アリエスが發した言葉を、優姫は一言一句逃さず噛み砕き理解しようとする。

過去にもアリエスはアリエスであったという記憶。

現在もその記憶を持っているということ。

そして先代ゾディアックは、旅を失敗した。

生まれ変わった今も、同じ星宿として旅をしなければいけないということ。

「それじゃあ、私も……？」

優姫は考えた末に導き出した答えを、言葉にはせずに確認した。

アリエスはそれが正しいのだというように頷く。

アリエスは過去にも 白羊宮 アリエスだった。ならば、今代のヴァルゴであるという優姫もまた、過去に 処女宮 ヴァルゴであったということなのだ。

「なぜ、私にだけ過去の記憶があるのかは分からない。お前にはヴァルゴであった記憶はないようだし、過去にゾディアックであったと王都を訪れる者もいなかった。恐らくは私の場合が特殊なのだろう」

「私の前世が、ヴァルゴ……」

でもそれなら、と反論したい気持ちに襲われる。特殊なことならもうひとつある。

「でもそれなら、どうして私はちきゅ——異世界に生まれてるの？ だって異世界からゾディアックが召喚されたのは例がないって言うてたじゃない。今まで、ずっとずっと、ゾディアックはこの世

界だけに生まれていたのに、どうして今回に限って……」

首を捻る優姫。アリエスもまたその問の答えは見つけられないように、沈黙が落ちた。

「……ねえ、もしかして、レオって何か知ってるんじゃない？」

優姫はレオと初めて会った時のことを思い出していた。

レオは、優姫がこの世界に来る前——つまりは日本にすでに現れていたのだ。異世界から誰がどうやって自分を召喚したのか。同様に、異世界の住人であるレオが、一体どのようにして日本に現れたのか——思えば、その疑問は今のアリエスの話の疑問に通じるものがあるのではないか。

しかし、そんな考えを口にした刹那。

「あの裏切り者が！」

アリエスの怒声が轟いた。びくりと優姫の肩が震える。

「あの裏切り者が、関係などあるものか！ ユウキ……、お前は何か勘違いをしていないか？ 奴に助けられた、と言ったな。それが優しさだと？ それが善意によるものだと？」

優姫を射抜く空色の瞳。優姫はアリエスの問に答えることが出来なかった。

「……奴が大罪人であると断言出来る理由を教えてやろう。私には過去生の記憶があると言ったな。だから、私は覚えているのだ——私自身の最期をな」

最期——前世の自分が息絶えるその時。

優姫はそれを想像して身震いした。自分が死ぬ瞬間を覚えているということは、精神的に一体どれほどの重荷を与えるのか。少なくとも、優姫にとってそれは恐怖でしかなかった。

「周囲に倒れるかつての仲間達、レオが握る血塗れの刃。そして、奴は……その刃で私を切った。……そこから広がる痛みと熱、喉を込み上げる血に声を出すことすら叶わず、視界が狭まりやがて何も見えなくなり……私は、死んだのだ」

全て覚えている——アリエスは絞り出すように、優姫にとって衝撃的な事実を告げた。

「私は、レオに殺された。だから断言出来るのだ、その光景を見ていたからこそ、奴は大罪人だと」

「……そ、んな」

あまりの衝撃に、優姫は言葉を失う。それと同時にひどい混乱に陥った。

アリエスが嘘を言っているようには見えない。しかし優姫はどうしても全てを受け入れることが出来なかった。それは願望と言えるものだったかもしれない。

けれども、アリエスに対してそれを口に出すようなことはしない。押し黙ることしか出来ない優姫。その肩に手を置かれ顔を上げると、そこにはそれまでの怒りをあらわにしたものとは打って変わって、表情を柔らかくしたアリエスがいた。

「ユウキ、お前はレオに近付くな。今生でお前を守るのは、白羊宮 アリエスである私の役目だ」

優しく微笑むアリエスの姿——金の髪と空色の瞳を持つ青年の笑顔を初めて見た優姫は、一瞬ときりとする。

「さあ、行くぞ。森の出口までもうすぐだ」

道の脇に控え目に立てられた看板を指差し、アリエスが言う。そこには、森の出口はすぐそこだということと、オーランド修道院までの距離とが記されていた。

優姫は小さく返事をしながら、一瞬ときめいてしまった胸を押さえた。

よくよく考えれば、アリエスもまたレオと同じく美男子の類に分けられるのだ。レオが少し影のある憂いを秘めた美青年だとしたら、アリエスは見目麗しい正統派な美青年だと言えた。

優姫は歩き出したアリエスの背を見つめながら、歩を進める。歩きながら、レオがヴァルゴにしたことについて聞きそびれたことを思い出した。しかし、やはりそのことを口にするのは躊躇われ。

修道院に向けて二人は歩き続ける。
それぞれの想いを抱きながら。

15 修道院にて

「まあまああ、こんな夜更けに。どうぞお入りなさい」

日が暮れて大分過ぎた頃に、優姫とアリエスはオーランド修道院の扉を叩くと、柔和な笑みを浮かべた年配の修道女に迎え入れられた。

通された応接間は質素であつたが、どこかアンティーク調で優姫は思わずきよろきよろと辺りを見渡した。

「夜分申し訳ない。実はお尋ねしたいことがあるのですが」

修道女が一度席を外し、茶を用意して戻つて来るやいなや、アリエスが尋ねる。あまりの唐突さに優姫は驚いたが、修道女は特に意に介した様子もなく答えた。

「はい、何でしょう？ ……王都の騎士の方とお見受けしますけれど」

にこにこ笑顔を浮かべながら、修道女の手が優姫を指した。どうやら、そちらの方は、と言いたいようだった。

「私は王都シャングリラの騎士団を率いるアリエスと申します。この度は王陛下よりゾディアックとして勅命を賜つてここに来ております。彼女もまたゾディアックの一員です」

「ゾディアック……！？」

まあ、と修道女は目を見開いた。かと思うと、両手を組み深々と頭を下げた。

「ああ、主のお導きに感謝いたします。……それでは、ようやくゾディアック集結の兆しが……！」

よく見れば修道女は涙を浮かべているようだった。優姫はシャングリラの城下街でも思ったが、ゾディアックはこの世界の人々が切に待ち望んだ希望なのだと、実感した。

「導星 である彼女に導かれ、この場所へとやって来ました。シスター、この修道院に石を持った者がいると、噂に聞いたのですがご存知ですか？」

「石……？ ああ、あの子のアレのことかしら……。ああ、でも……」

アリエスの言うことに思い当たることがありながらも、いきなりしどろもどろになる修道女。笑顔であることには変わらないが、若干引き攣っているようにも見える。

「呼んで頂きたいのですが」

「それが、その……あの子は……」

「呼んで頂きたいのですが」

「ちょ、ちょっとアリエス！ もう少し穏便に……、いきなり私達が来てびっくりしてるのかもだし、ねえ？ そうですよね」

なぜか煮え切らない態度の修道女に、アリエスが再び同じ言葉を発するのを見て、優姫は思わず助け舟を出す。口調は丁寧だったが、二回目の声色はひどく冷たいものだったからだ。

優姫の発言にアリエスが眉を上げたようだが、気にせずに続ける。

「大体アポを取って来てるならまだしも、こんな夜に、しかもアリエスみたいな人にそんな風に言われたら誰だって萎縮しちゃうし！」

修道女の前にずいと進み出る優姫。

そしてにこやかに、尋ねた。

「あの、私達ゾディアックとして星降る丘にいかないといけないんです。それで、ここに他のゾディアックがいるみたいなんですけど……呼んでもらえます、よね？」

「ああ……、呼んで差し上げたいのはやまやまなのですが、あの子は――」

「――家出だつて。この場合は修道院出、つて言うのかな」

優姫が発した言葉に、隣に座るアリエスが眉間に皺を寄せた。微動だにしないそんな彼からは怒りのオーラが迸っている。

先刻、やっと重い口を開いた年配の修道女は、ゾディアックとし

ての証たる宝石らしきものを持つ若い修道女は、今朝修道院を飛び出したと言う。規律正しく、何の変化もない毎日はもう嫌だ、と叫びながら修道院を後にした修道女のことを、年配の修道女は、恥ずかしながら話してくれたのだ。

そんなことがあるのかと、優姫は驚いたが、ちらりと隣を盗み見るとアリエスもありえないといった顔で呆然としていたので、優姫の感覚は恐らく正しいのだろう。

しかし、そんな理由でアリエスが納得するはずもなく。

結局、二人は引き続き応接間で待たされることになり、修道女達はきつと遠くには行っていないだろうということで、近場を搜索中なのだ。

「まあまあ、アリエス！　すぐ見つかるよ。いざとなったら私の石で探せばいいんだし」

まあお茶でも飲んで、と優姫はアリエスにすでに冷めてしまった茶を勧めたが、冷やかな視線を向けられた後、ふいと目を逸らされた。

アリエスに向けた笑顔を虚しく残しながら、優姫は小さく嘆息する。どんよりとした空気の中、ポケットの中の石を取り出しすと手の平に載せ、それを握り念じた。

石は熱を発し、瞬く間に青紫色の宝石に変化すると、光りを放った。宝石と同じ色をした光の軌跡は、頭上に向かってどんどんと伸びていく――上に。

「……上？」

それは当然の疑問だった。

外に飛び出したと言うなら、光は外に向かって射されなければならないのだから。思わず優姫とアリエスは顔を見合わせた。

「もしかして、これってあてになってないんじゃない？」

「……。いや、そんなはずはない」

優姫の言葉に逡巡しながらも、きっぱりと否定するアリエス。その表情はさらに曇る。

そうだとしたら、この光の説明はどうすればいいのか——優姫は視線を光の軌跡になぞらせ天井を見上げた。

「じゃあ天井裏にでもいるんじゃない」

ぼそりと呟く。

それと同時にアリエスがすつくと立ち上がった。驚いて優姫が見上げると、アリエスは真剣な面持ちで頷いた。

「そうだな、その可能性はあるな。ここにいても仕方ない、行くぞユウキ」

「ええっ！？」「冗談んだけど……って、ちょっと待ってー！」

思い立ったアリエスは優姫の腕を掴み歩き出す。優姫は引つ張られるようにしてアリエスについて行くような形になった。

応接間の扉を抜け、静まり返った回廊を進む。目指すは上階。光の指し示す方向だった。

優姫は息を切らしながらアリエスの後ろを走る。王都シャングリラの騎士団の長であるアリエスは、さすがと言っべきか息ひとつ切ることなく涼しい顔で突き進んでいた。

螺旋階段を駆け上がり、二階の廊下を抜ける。人気がないのは先のアリエスの発言によって、家出入の搜索に皆出払っているからのだろう。

もしこれで見つけることが出来なかったら——優姫は自分で言った冗談の発言を後悔した。懺悔出来るなら懺悔したいところだ。

しかし次の螺旋階段を昇り、三階の廊下に辿り着いた頃、息も絶え絶えになっていた優姫は、ついに足を止めた。

「……はあはあ、もう無理だし……」

その時、何か物音が聞こえた気がして、優姫は周囲を見回した。

「あれ……？ あそこのドアだけ開いてる」

視界に入ったのは、斜め前方にある扉。他のものより厳かな雰囲気を感じ出したそれは開け放たれている。

優姫はすでに姿の見えなくなったアリエスを追うことは諦め、扉の前に進み、ゆっくりと窺うように中を覗き見た。

「わあ……！」

優姫の視界に映ったのは、聖堂らしき部屋。この世界の聖人を祭つてあるだろうそこは、白を基調としており、深緑色のカーペットがよく敷かれたうえにいくつかの長椅子が置かれている。奥の台には赤い布がかけられ、正面には見たこともないような大きなステンドグラスがあり、白い壁にはいくつかの絵がかけられている。もちろん、優姫にそれが誰なのかは分からないのだが。

「すごい綺麗……、これがこの世界の神様なのかな」

歩き進み、壁にかけられた絵の前で立ち止まりまじまじと見つめ、感嘆の息を漏らした。優姫は無神論者ではあったが、その絵に描かれていたものは神々しく見とれるほどのものだと言えたからだ。

思わず二度目のため息を漏らしかけた時だった。ぐう、と背後から音が聞こえた——それは例えるなら、腹の鳴る音のような。

優姫は勢いよく振り返った。

「あ」

「あ——!!」

そこには、今まさに聖堂の扉を出て行こうとする若い修道女の姿があった。

16 その名はタウロス

厳かな聖堂の中、優姫は若い修道女と向かい合っていた。

応接間に対応してくれた修道女と同じ修道服を着た少女は、いかにもまずいといった表情で固まっている。栗色の髪を高くひとつに結い上げた彼女は、すぐに気を取り直して、気が強そうな同色の瞳できつと優姫を睨みつけた。

「あんた、誰」

ぶっきらぼうな声に面食らう優姫は、声を出すことが出来ない。

「もしかして新人？ ご愁傷様！ こんな堅苦しい所へようこそ。じゃあ、私はこれで」

怒ったように、全く心のこもっていない言葉を言い放ち、優姫が呆気にとられている間に扉を出て行こうとする。そんな彼女の首に大振りの宝石がはめ込まれた首飾りが揺れたことに気付いて、優姫は慌てて彼女を呼び止め、走り寄った。

「ちょ、ちよつと！ あなたってもしかして家出人！？」

家出人、という言葉に反応して足を止めた少女の腕を掴む。振り返った彼女の顔が歪んだ。

「はあ！？ 家出人って私のこと言ってるの？ ふざけないで、私は自分の家に帰るだけだっつーの！」

「怖っ！ なにこの人、この世界のヤンキー！？」

修道女らしからぬどすの利いた声に、優姫は心底震え上がった。しかし掴んだ手は離さない。この手を逃せば、今度はアリエスが烈火のごとく怒り出すだろうことは、目に見えて明らかだったからだ。

「なに掴んでんの」

「だ、だって……」

きらりと修道女的首飾りが揺れる。優姫の持つ導石の光は、その首飾りにはめられた黄褐色の宝石を指し示していた。

修道女の神に仕える身らしからぬ眼光で射抜かれ、怯みそうになるのを堪えながら、優姫は意を決して話しかける。

「あなたを探してたの！ 私達と一緒に来て！」

「はあ？ 何いきなり？ 離してくれない、痛いんだけど！」

「離さないっ！ だって離したらアリエスが……」

「わけわかんない！ あんた誰よ、さっさとこの手離せバーカ」

罵声を浴びせられながらも、両手でがっしりと掴んで離さない。

この修道女がゾディアックであることは間違いないのだ。しかし修道女は修道女で、ついには言葉だけでなく手を出そうと、優姫に掴まれていないほうの腕を振り上げた。

優姫は、目を閉じる。

乾いた音が、聖堂内に響いた。

しかし覚悟していた痛みは訪れず、優姫は恐る恐る目を開けた。

「あっ！」

二人の間に割り入り、優姫に振り下ろされた腕を受けたのは、アリエス。

「どこで油を売っているかと思えば……ユウキ、この娘が？」

涼しい顔で修道女の腕を掴んだままのアリエスに尋ねられ、優姫はこくこくと頷いた。修道女は自分の攻撃を遮った騎士を前に硬直している。

アリエスは導石からの光を受けた修道女的首飾りに視線を落とし、嘆息した。

「……随分なじゃじゃ馬だな、今生の 金牛宮 タウロスは」

金牛宮 タウロス——その言葉に修道女がぴくりと反応する。振り上げていた腕を下ろし、摩りながら目の前で対峙する二人に栗色の瞳を向けた。

「それ……どうして」

「それ、と言うと？」

修道女は黙り込み、俯く。それを見てアリエスは口を開いた。

「夢を見るのだろう？ 自分がタウロスと呼ばれる夢を」

「……！」

アリエスが淡々と言葉を発すると、俯き伏せていた顔を上げ、修道女は目を見開いた。そしてその目が潤んでいく。

優姫はそんな二人の様子を、ただ眺めていた。

「もしかして……あなたも、なの。あなたも夢を見るの……？　じやあれオは？　レオもいるの？」

涙を浮かべる修道女。

しかし、優姫は気付いていた。彼の名前を発した瞬間、聖堂内の空気が凍りついたことに。

今度は優姫が慌てて二人の間に割り入った。

「いやいや！　私達二人だけ！　レオがいるわけないでしょ！？」

「そう……」

首と両手をぶんぶん横に降る優姫に、修道女は顔をしかめる。何かを言いたげに口を開いたが、結局そこから言葉が発されることなく、優姫は胸を撫で下ろした。

この時には、すでに場の空気はそれまでのものに戻っており、それはひとえに優姫の功績だと言えた。

「……ユウキの言う通りだ。この場にレオがいるはずはない。奴が逆賊であることは広く知れ渡っていることだろう」

「そう、そうよね……。じゃあ、あなた達は？」

「あ、私はさが——」

「彼女は 処女宮 ヴアルゴだ。そして私は 白羊宮 アリエス。君を探しにここまで来た」

相模優姫、とフルネームで名乗ろうとして逡巡する優姫を遮ってアリエスが名乗った。そのまま手を伸ばし修道女の首飾りに触れ、黄褐色の宝石を掌に載せる。

「これはトパゾス、まさしくゾディアックの証。君は私達と共に星降る丘へ行かねばならない——ゾディアックの一員として」

修道女は目を見開いたまま動かない。動けないといった方が正しいのかもしれない。何しろ、言葉こそ丁寧であったが、アリエスが彼女に向けた空色の瞳には、否定を許さない色が秘められていたからだ。

「これは王陛下の勅命である。来て……くれるな？」

落ちる沈黙。

先に口を開いたのは、修道女だった。

「わ……かりました。行きます、私。そのかわり、ゼクセンへ寄っていただけます？ 私の実家がありますの。ここを去って旅立つこと、私から両親に伝えたいから」

それまで優姫にきいていた罵り口調が嘘であるかのようにしとやかに、尚且つ可愛らしい笑みを浮かべて、たたずまいを直した修道女はアリエスの要請を快諾した。

その後、修道女の言葉を聞き入れ、ゼクセンに寄る約束をしたアリエスと優姫は、戻って来た修道女達に礼を述べ、若い修道女を加えて再び出発したのだった。

17 意思表明

「……エルレイン？ タウロスじゃなくって？」

優姫は隣を歩く修道女が名乗った名前をそのまま繰り返した。修道女——エルレインは眉間に皺を寄せ盛大にため息をつく。

「はあ？ そんなわけないでしょ、私の名前はエルレイン。エルレイン＝シデイス。金牛宮 タウロスなんて単なる称号に過ぎない。大体、タウロスなんていかつい名前、願い下げ！」

きつい口調で言い放つエルレインの姿に、言葉を失う優姫。

エルレインの優姫に対する態度は、アリエスに対するそれとは正反対だった。

詳しいこともほとんど知らずに、旅立つことを決意した優姫は、自分で決めたとはいえ、半ば強制的に出立することとなったこの旅で、初めて得た同年代、そして同性の仲間と打ち解けるべく話しかけた。しかし返ってくる言葉はどうにもきついものばかり。それでも諦めまいと果敢に話しかけるが、こうもつれないとくじけそうになる。

ちなみに、彼女がアリエスと話す時は、同年代とは思えないほど、物腰しとやかだった。そんな彼は、二人の遙か前方を歩いていた。

「……二重人格」

耐え切れず、ぼそりと呟く。

小さく発したはずの言葉も、なぜか拾われてしまう始末。エルレインにぎろりと睨まれて、優姫の声は尻萎みになった。

「あんだだつてヴァルゴって名前じゃないでしょ！？ ユウキだっけ？ 変な名前！ 大体あんだ、何にも知らないのね。異世界って相当平和ボケしてるんだ」

「……私は」

来たくて来たわけじゃない——その言葉は、結局声にすることが出来なかった。なおもエルレインは続ける。

「あの人——アリエスも変わってるし。『この名は私の誇り。昔の名など捨てた』だって、変」

小声でアリエスの口まねをしながら肩を竦める。全く似ていなかったが、その言葉は正しい。

この旅路に加わり、まず始めに自己紹介をしたエルレインだが、その後に優姫とアリエスの二人にもそれを求めた。しかし優姫は本名を名乗ったが、アリエスは名乗らなかったのだ。大体、それが本当の名ではないなど思いもしていなかった優姫にとって、そのことはまさに青天の霹靂だった。

「私は私の名前に誇りを持っているの。だからタウロスなんていかつい名前で呼ばれるのは、嫌。もしその名前で呼んだら、ただじゃおかないから」

尚も睨みを利かせているエルレインの話を右から左へ聞き流しながら、優姫は頭の中を整理していた。

新たな仲間を得て、次なる目的地はすぐに決まった。金牛宮タウロスであるエルレインのたつての希望で、彼女の実家があるというゼクセンへと向かうことになったのだ。ゼクセンへは一度亡者

の森に戻り、三差路を東に進む必要がある。

この一連の出来事は、ゼクセンへの道中での出来事だった。よくよく考えてみればおかしいことだったのだ。

もし生まれながらに星宿の名を与えられていたとしたなら、道星である優姫の存在は必要ない。その名を持つ者を、王都に集めればいいのだから。しかし、それは不確かな方法だと言えた。同じ名を持つ人間は少なくないだろうし、逆にその星宿を持ちながらも親が気付かずに違う名を与えてしまうこともあるだろうから。

アリエスが当然のようにアリエスと名乗った為に、優姫は今さらながらその考えに辿り着いた。そして、浮かんだのはもうひとつの疑問。

「ねえタウロ……じゃなくエルレイン、聞いていい？」

危なく、ただじゃおかないことになりかけて、慌てて言い直す。栗色の瞳が一瞬釣り上がったが、エルレインはすぐに無言で優姫に向き直った。

「その宝石は？　ずっとエルレインが持ってたの？　誰かに貰ったのか？」

優姫の脳裏に浮かんだ疑問——それはゾディアックの証たる宝石のことだった。

名前と同じように、その星宿の主が正しい宝石を持っている可能性は、限りなく低い。宝石は高価であつたし、この異世界であつても宝石を持って産まれ落ちるようなことは、さすがにないのだ。

実際、優姫の石も優姫本人が持っていたものではなく、レオに唐突に渡されたものだった。

「はあ……、あんた本っ当に何も知らないんだ。ていうか、あんた

だって石持つてるから分かってるでしょ！？　いきなり石は変化したのよ。私のこの首飾り、安物だったし。はじめはただのガラス玉だった」

「え？　変化？」

「朝起きたらもうその時には、よ。ガラス玉が黄褐色の宝石になっていたのは。……でも、言ったところで誰も信じなかったけど」

そこまで言つて、どこか遠くを見るように目を細めるエルレイン。優姫はそんな彼女の話を聞いていて、今度は不安になる。

優姫の持つ　導石　——それはレオに渡されたものだ。託宣によつて予言されていたヴァルゴの召喚と言うが、エルレインの話を聞けば聞くほど、それは不自然に感じる。

「……ところで、あんた」

しかし、そんな優姫の思考は、エルレインに肩を強く叩かれたことによつて吹っ飛んだ。

気を取り直すと、エルレインは足を止めまっすぐ優姫に向き直っている。栗色の瞳は相変わらず鋭い。

「な、なに」

「あんた……ヴァルゴなんですよ。じゃああんたも夢を見てるの？」

「夢……、うん、一応は」

優姫は言い淀んだ。

見ているには見えている。ただし、この世界に来るまでは音のない、

レオと二人きりでいる夢で、ほとんど内容もないようなものだったのだが。

「じゃあレオは？ レオのことあんたはどう思ってるの？」

エルレインの口から唐突に飛び出した彼の名前に、優姫の心臓が跳ね上がった。目の前の栗色の瞳はさらに近づき、優姫が答えるのを待っている。

「レ、レレレレオのこと？ どうしてまた！？」

「黙って答えなさいよ！ で、どうなの？」

「どつって言われたって……別に」

「夢を見るのに？」

「……………うん」

その剣幕に思わず心にもないことを言ってしまう優姫。なぜかそうした方がいいのだと、直感が働いたのだ。そしてその直感の中のしつらしく、そう答えた瞬間エルレインの表情が和らいだ。

「そう。そうなんだ。それならいいのよ、ヴァルゴ……って今はユウキだっけ」

口調は変わらないが、その笑顔は初めて優姫に向けられたものだ。栗色の瞳を細めて微笑むエルレインは、美人の部類に入るな、と優姫は思ったが、すぐにその考えは覆される。

「じゃあ言っておくけど、私、レオのことが好きなの。昔も……今も。だから、分かっているわよね」

柔らかな笑みは、氷のような鋭い微笑に変わっている。それは美しさよりも恐ろしさを感じるような。

「私から彼を盗らないで」

そうエルレインが言い放ったその時、遙か前方に行くアリエスの声が響いた。遅れに遅れている優姫とエルレインを呼ぶ声だった。

その声を受けて、まああなたには関係ないか、と最後に付け加えてからエルレインは踵を返した。優姫はわずかに身震いして、その後を追う。走りながら自分の発言を後悔したが、もうすでに遅かった。

18 覚えているというのと

私は今、本っ当に頭にきている。
他でもないアイツのことだ。

「何してる、ぼうつとしているな」

相変わらず、口うるさくて、何をするにも上から目線の命令口調。
何かにつけて、王立騎士団の誇りがどーのこーのと。

「おい、次の目的地を確認しろ」

仲間が増えても、私にだけ全然態度も変わらないし、本当にうんざり。きっと、王都育ちの騎士団長は、孤児の私なんか、同じ人間と思ってないんだわ。

だって他の人達には、あんなに優しい。

「——アルゴ、おいヴァルゴ。聞いているのか。早く導石を——」

「……どうせ、私は」

私は、この石と同じなんだわ。
人、じゃなく物と同じ。

本当に、本当に……悔しい。

「ヴァルゴ!? おい……っ」

どうにかして、見返してやりたい。
私だって、同じ人間なのよ！

「——んあ？」

ぱちぱちと薪が爆ぜる音に、優姫は情けない声を出した。目の前に広がる満天の星空に加えて、背中に触れる固く冷たい土の感触で、優姫は自分が横になっていることに気付いた。

起き上がるうとして体を動かすと、手足にわずかに痛みが走る。腕を上げると、そこにはいくつかの擦り傷があった。

首を動かし辺りを見回す。

近くには焚火があり、その側には毛布にくるまって眠るエルレインがいる。

「あれ……私……」

優姫は今だに現状を理解出来ていなかった。

修道院を出発し、ゼクセンという街へ向かう為、再度亡者の森の中を進んでいる途中だった——気がするの確かだ。しかし野宿に至った経緯は覚えていない。

「気が付いたのか、ユウキ」

降ってきた声の主は、アリエス。

声のした方に視線を向けると、焚火から少し離れた場所で、彼は胡座をかいていた。

「蛇の巣に落ちかけて、頭を打ったんだ。覚えているか？」

「蛇の巣……」

言われてみて、ぼんやりと思い出しそうになる。そういえば、そうだったのかもしれない。それにしても――。

「……この世界には、蛇が多いんだね」

「ああ、それも災厄のひとつだからな」

異世界に来たばかりの優姫が蛇に襲われたのはこれで二度目だ。さらに、この世界に来る直前にも大蛇に遭遇している。偶然にしては、その回数は多かった。

「……アリエス」

優姫が呼ぶ。

アリエスは顔を上げ、視線だけを向け応えた。

「……過去のこと覚えてるって、辛い？」

ぱちぱちと薪が爆ぜる音が宵闇に響く中で、優姫は体を起こし、返答を待つ。アリエスの声はすぐには返ってこなかった。やがて大きく息を吐く音が聞こえたかと思うと、低く、ゆっくりとした声が優姫の耳に届いた。

「なぜ、私だけが……」と思ったことはある。こんなに鮮明に、今際のことまで覚えているのは正直——」

そこまで言ってアリエスは黙り込み、優姫にまっすぐ視線を向ける。

「——お前は、どうなのだ？ 夢を見るだろう？ 過去——ヴァルゴであった頃の」

「私——」

逆に問われて、優姫は言葉に詰まった。

まさか、あの夢が過去であつたなどと思っていなかったが、アリエスやエルレインの話を聞いた今は、そうだったのかもかもしれないと思うことが出来ていた。しかし、それは過去の出来事の一端にしか過ぎないのだろう。

ただ呑気に、レオのことがかつこいいと話していた頃を懐かしく思う。あの時は、まさか見ていた夢が絡んでこんなことに巻き込まれるなど、想像していなかった。

「——は、あまり夢を見ていなくて」

そうか、と短い声が返される。

優姫は少しだけほっとして、胸を撫で下ろす自分がいることに気付く。全てを覚えているアリエスに、無知な自分を晒すことをわずかに緊張していたのかもしれない。

しかし、一度緩みかけた空気は、続けられたアリエスの言葉に、再び張り詰めることとなる。

「……レオは、お前の夢に出てくるのか」

先程よりも、低く重い声。そこには何の感情もない。にもかかわらず、びりりと大気は震えた。

優姫は怯みそうになるのを堪え、答えた。

「うん、出て……くるよ。……レオは私の夢に、出てくる」

漆黒の髪を揺らし、深緑の瞳を細め微笑む青年。白を基調とした服に腰にさした長剣。そんな彼が手を差し延べる姿が、優姫の脳裏に浮かぶ。それは、初めて夢に現れた時のレオの姿だ。

けれど、同時に思い出すのはアリエスの話——もちろん優姫はまだ全てを信じていないのだが——レオによって殺されたという過去のアリエス。そして全てを覚えている彼は、レオをひどく憎んでいる。

優姫はアリエスの問いの真意が分からなかった。だからこそ、正直に話す。

「レオは、笑顔だった。……最近見た夢では、しかめっつらばかりだけど。だから、私は——アリエスが言うような人には見れない、レオのこと」

何より、何度も助けてくれたという事実があるのだ。

アリエスのまっすぐな視線に晒されながら、優姫は最後まで言い切った。

きつとまた怒鳴られるだろう——しかし、そんな心配は杞憂に終わる。アリエスは俯き、そうか、と小さく呟いただけだった。

拍子抜けすると同時に、少しの欲が優姫に生まれた。もつと聞けたらと、そう思った。

「……ねえ。過去のこと、聞かせてくれないかな。もっともっと、知りたいんだ、私」

優姫の希望に、アリエスはゆらりと立ち上がる。目の前まで歩み寄り、腰を下ろすと、期待を胸に抱く優姫に手を差し出した。手の平に載るそれは、アリエスの耳飾り。視線を落とすと、その耳飾りに嵌め込まれた無色の石には、焚火の色が揺らめいている。

「……手を重ねろ。それが一番手っ取り早い」

アリエスが囁くように言った。

しかし、その行為の意図が分からず、優姫は確認するように目の前の青年を見上げた。炎が映り込んだ瞳は、ただまっすぐ優姫を見据えている。

「これに何の意味があるの——」

警戒するわけもなく、アリエスの手に自分の手を重ね、そこにある耳飾りに触れた。

「——っ!？」

刹那、優姫の視界は急激に開けた。

19 白羊ノユメ

＋＋＋

「てことで、俺がアリエスなんで。よろしくー！」

ゾディアック——それは世界を災厄から救う役目を担った者達の総称。

すでに十一人が集結し、最後の一人として一員に加わった俺は、まだ十五。 白羊宮 アリエスとしての俺は、仲間達の中でも若かった。誰にだったかは忘れたけれど、こう言われたことがある。お前の性質は、良く言えば勇敢であり、悪く言えば命知らずだ、と。

俺の住んでいた村は、小さな農村だった。例に漏れることなく、俺の村も災厄に見舞われ不作が続いていたが、俺にとって幸運だったのは、村の中でも比較的裕福な家庭だったということだ。父親が村でただ一人医師としての心得があつたことが、幸いしたのだろう。とにかく俺は、特に危機感を感じることもなく、毎日を平穩無事に過ごしていた。ゾディアックとして旅立つことを決めたのは、世界を救う為、というよりは、代わり映えのしない毎日から脱却したいという気持ちのほうが大きかったと思う。

「私はヴァルゴ。よろしくね」

言わば、退屈しのぎに始めた旅。

でもそんな旅もすぐに楽しいものになった。

導石の持ち主——ゾディアックの一員として俺を探し当てたヴァルゴは、とても美しく、その美貌に似つかわしくないほどに気さく

な女性だったからだ。

一目惚れ、だったのかもしれない。

腰まで伸ばされた、流れるような金の髪。舞いを踊る、細くしなやかな体。澄んだ青い瞳と、ふつくらとした薄紅色の唇。百人中百人が美しいと言っだろう容姿を持ったヴァルゴは、気取ることなく親しい友人のように接してくれた。

「私は孤児だったの。でも旅の一座に拾われてね。この旅を始めるまでは舞いを踊る毎日だったわ」

「へえ、俺は退屈な毎日を送ってたよ。親父もお袋も、家を継ぐために勉強しろってうるさくてさあ。でも誇り高きゾディアックの一員に選ばれたって言ったら、泣きながら喜んで送り出してくれたよ」

お互い、色々な話をした。

自分とは全く違う生き方をしてきた彼女の話を聞くことは新鮮で、面白かった。

やがて、気付く。

それはごくわずかな兆候だったような気がした。もしかすると、他には誰も気付いていないかもしれない。好意を寄せ、いつも視線で彼女を追っていた俺だからこそ気付いたのかもしれない。

「……ヴァルゴは、レオのこと好きなのか？」

指摘した瞬間、見開く瞳。

紅色に染まる頬。

ヴァルゴは、肯定はしなかった。しかし、否定もしなかった。それは、確信に変わった瞬間。
ヴァルゴは、レオが好きなんだ――。

「……どうして、あんなヤツ」

思わず本心が漏れた。

ヴァルゴは、答えなかった。

だいたい、ヴァルゴのレオへの想いは、俺の理解の範疇を越えている。

レオは、ヴァルゴとずっと一緒だったらしい。王都から今に至るまで、他の誰より共にいたのだ。でも、二人の間柄はどう見たって対等ではない。

レオは王都の騎士団長だか何だか知らないけれど、いつも高圧적이다。それは特にヴァルゴに対してがひどい。口を開けば、二人はいつも喧嘩をしている――そんなイメージすらある。そんなヤツに対して、どうすれば恋心が抱けるといえるのか甚だ疑問だったけれど、それを知ったからと言って、俺のヴァルゴへの想いが薄れるわけもなく。

つまりは、おの威張りくさったあいつは、俺のライバルとなるのだ。

俺は、あいつが嫌いだ。

ライバルだから、なんてそんな安っぽい理由だけじゃない。

あいつはいつも人を馬鹿にしたような目で俺を見てくる。そんなに騎士であることが偉いのか――だから、俺は勝負を挑んだ。

「お前は一体、何をしたかったんだ」

遙か頭上で吐き出される息。

刃が音もなく鞘に納められ、困惑した眼差しが注がれる。
完敗だった。

俺だって、全く剣が出来ないわけじゃない。村の中でも、そこそこの腕で通っていたはずだった。

それなのに、この目にまざまざ見せつけられたのは、圧倒的な技術の差。剣は一度たりとも当てられず、太刀筋を見ることがすら叶わなかったのだ。

「……まあ、筋はいいから全部終わったら、一度王都へ来るといい。陛下に仕える騎士団として取り計らおう。立てるか？」

立てないはずなんてなかった。

レオに当てられたのは柄のほうなのだから。

それでも、素直に立ち上がることは出来なかった。

「何だよ、勝負に勝っていい気分かよ」

「……アリエス」

まっすぐ俺を見てくる深緑の瞳と、黒髪をかき上げて浮かべる困惑の表情。悔しい、と言うことも悔しいけれど、レオは男の俺でも認めてしまう容姿の持ち主だ。

けれども、そうだとしてもヴァルゴがこいつを好きだということは、どうしても認めたくなかった。

「俺は、テメーなんか大っ嫌いだ」

差し延べられた手を払いのけ、俺はそう吐き捨てる。もう、全てが気に食わなかった。

でも、またこの時は、ただそれだけだった。ただ、嫌いだ、というだけ。それが、変わってしまったのは、あの日の出来事――。

＋＋＋

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7361w/>

ゾディアック

2011年12月1日22時46分発行